

たて
立 の 野 遺 跡

(A地区)

平成17年11月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近は、小河川低地によって刻まれた低台地が南北に広がっています。ここには東谷古墳群をはじめ、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して遺跡群を形成しております。近年宇都宮環状線や北関東横断道路の開通、そして独立行政法人都市再生機構による土地地区画整理事業も進行中です。これらの開発に伴って東谷・中島地区の遺跡群は発掘調査が行われ、古代の人々の営みが大規模に姿を現しつつあります。

今回刊行の運びとなった立野遺跡は、この遺跡群の中の遺跡で、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化センターの確認調査により県内最大級の竪穴住居跡の存在が明らかになっていました。その後商業施設建設による影響を受けることになり、関係機関との協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。その結果、一辺が12mに及ぶ古墳時代の巨大な竪穴住居跡をはじめ、中世からそれ以降に及ぶ遺構、遺物が多数出土しました。またこの住居跡からは、凝灰岩切石を用いた県内でもあまり類例のない形態のカマドや、柱穴内に遺存していた木質柱痕も確認され、これらは当時の集落の様子や特殊な住居の構造などを知るうえで、非常に貴重な資料を得ることができたものと考えております。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成17年11月

宇都宮市教育委員会

委員長 伊藤文雄

例 言

1. 本書は、株式会社福田屋百貨店によるインターパークビレッジ建設に伴う、栃木県宇都宮市東谷町インターパーク58街区に所在する「立野遺跡」の埋蔵文化財発掘調査に関する報告書である。
2. 発掘調査は、調査主体者を宇都宮市教育委員会とし、調査実務は㈱日本産業史研究所が調査団を組織してこれにあたった。尚、今回の発掘調査は、宇都宮市を主体者とした1回目の立野地区の調査であり、これまでに(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターの行った1~8区の表記とは区別し、A地区とした。また遺構番号についても一部の遺構では番号が重複してしまうものもあるが、A地区としての通し番号とした。
3. 調査は、平成17年4月21日~同年6月4日まで野外調査を実施し、その後の出土遺物整理・報告書作成作業を平成17年11月まで行った。
4. 野外調査は、水野順敏、青木健二、三輪孝幸、栗田欣行が担当した。報告書作成作業は、挿図、図版の作成を青木、遺物の整理・実測は青木、中山哲也、倉田有子が行った。遺物写真の撮影、焼き付けは河野一也が行った。本文の執筆は、むすび2水野、調査区内出土遺物とむすび3を河野、その他の執筆と編集作業は栗田が行った。
5. S I - 3 カマドに使用されていた石材の、保存処理及び取り上げについては(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターの車塚哲久氏に御指導、御協力を頂いた。
6. 出土遺物、写真、図版、記録等は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 発掘調査及び整理作業については、宇都宮市教育委員会の指導を受けると共に下記の方々から御指導と御教示を賜った。記して謝意を表する。

嶋 静夫 (栃木県考古学会会長)、栗木 誠・大塚雅之 (宇都宮市教育委員会)、橋本澄朗・中山 晋
田代 隆・津野 仁・車塚哲久・馬場秀典・内山敏行・小出功一・今平昌子 (とちぎ生涯学習文化財団)、
㈸さつき測量、㈱福田屋百貨店、㈱ダイショウ、中村土建㈱

調査参加者

田嶋勝明・柏崎広伸・小貫 宏・中山信一・南雲 實・沼子和子・柳 英一・大塚昭男・押久保誠
野沢 廣・星野栄治・藤田俊雄・藤田文子・石川利明・大垣ミチ子・田崎軍次・福富 準・鈴木 清
鈴木タミ・山崎洋子・谷田部キヨ子・森脇一也・藤原美枝・石崎正則

凡 例

1. 本遺跡の略号はUTTTA (U^TUNOMIYASI-T^AT^ATENO遺跡A地区)で、遺物の注記はこれに従い行なった。
2. 第1図の地形図は国土地理院発行2万5千分の1「上三川」の一部分を複写して使用した。
3. 本書の遺構表示は、S I (竪穴式住居跡)、S E (井戸跡)、S K (土坑)、S D (溝跡)、S X (方形竪穴又は性格不明遺構)、D (周溝)、P (柱穴)である。
4. 遺構実測図の縮尺は住居跡 $\frac{1}{60}$ (S I - 2 全体図 $\frac{1}{60}$ 、S I - 3は $\frac{1}{40}$)、カマド $\frac{1}{30}$ 、土坑 $\frac{1}{40}$ 。また遺物実測図の縮尺は原則として $\frac{1}{3}$ としたが、一部の玉類、石器類については、スケールに示す通りである。
5. 土層図・断面図の水準線数値は海拔標高を示す。
6. 遺構図面の北方位は、座標北を表す。
7. 挿図の遺物番号は、本文及び図版番号と一致する。

目 次

I はしがき	
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 位置と環境	1
3. 周辺の遺跡	1
4. 調査の方法と標準土層	5
II 遺構と遺物	
古墳時代	5
1. 竪穴式住居跡	6
2. 土坑	19
3. 溝跡	20
中世以降	20
1. 方形竪穴	20
2. 井戸跡	23
3. 溝跡	25
4. 性格不明遺構	25
5. 土坑	25
調査区内出土遺物	29
III むすび	32
IV 自然科学分析	39

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	第16図 SD-1土層・出土遺物
第2図 宇都宮市周辺の地形図	第17図 SX-3・出土遺物
第3図 調査区全体図	第18図 SX-4
第4図 基本土層図	第19図 SX-5
第5図 SI-1	第20図 SE-1~6
第6図 SI-1カマド・出土遺物	第21図 SD-1~9
第7図 SI-2・出土遺物	第22図 SD-2~6・8断面図
第8図 SI-3炭化物・焼土範囲	第23図 SX-1・2
第9図 SI-3平面図・柱穴土層図	第24図 SK-2~20・23~25
第10図 SI-3土層断面図	第25図 調査区内出土遺物(1)
第11図 SI-3カマド	第26図 調査区内出土遺物(2)
第12図 SI-3出土遺物	第27図 立野遺跡、第4段階の住居分布図
第13図 SI-5・出土遺物	第28図 立野遺跡2000年度試掘、6区、今次調査区 における第4段階の遺構分布図
第14図 SI-6・出土遺物	第29図 栃木県下の大規模住居の規模比較
第15図 SK-1・21・22・出土遺物	

第30図 松野遺跡KT-3カマド(上・下)
第32図 住居出土土器の編年観(縮尺1/10)

第31図 凝灰岩製焚口部の比較(左:立野遺跡
A地区SI-3 右:殿山遺跡 KT-216)

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 調査区内土坑計測表

図 版 目 次

図版1

- A 調査区全景(北から)
- B 調査区全景(南から)

図版2

- A SI-1付近遠景(東から)
- B SI-1完掘全景(西から)
- C SI-1カマド(西から)
- D SI-1貯蔵穴(西から)
- E SI-2完掘全景(東から)
- F SI-2A区a期炭化材、焼土出土状況(北から)
- G SI-2A区b期完掘状況(北から)
- H SI-2B区a・b期完掘状況(南から)

図版3

- A SI-3完掘状況(西から)
- B SI-3遺物出土状況(西から)

図版4

- A SI-3柱穴ごとに人物配置(西から)
- B SI-3カマド土層(南から)
- C SI-3カマド天井部陥没状況(西から)
- D SI-3カマド天井部粘土除去状態(西から)
- E SI-3カマド保存処理作業(南西から)
- F SI-3カマド掘り方(西から)
- G SI-3張り出しピット(北から)
- H SI-3-P1柱痕遺存状況(南から)

図版5

- A SI-3-P3埋積土(南西から)
- B SI-3-P4柱掘り方(南から)
- C SI-3遺物出土状況(南から)
- D SI-3遺物出土状況(北から)
- E SI-5完掘状況(南から)
- F SI-5遺物出土状況(西から)
- G SI-5遺物出土状況(南から)
- H SI-6完掘状況(南から)

図版6

- A SI-6土層(Hr-FA)堆積状況(南西から)
- B SI-6遺物出土状況(南から)
- C SK-1完掘状況(西から)
- D SK-21完掘状況(東から)
- E SK-21土層(西から)
- F SK-22完掘状況(南から)
- G SD-1完掘状況(南から)
- H SX-3土層(南から)

図版7

- A SX-3完掘状況(北から)
- B SX-3遺物出土状況(南から)
- C SX-4完掘状況(南から)
- D SX-4柱穴、工具痕(北東から)
- E SE-1完掘状況(南から)
- F SE-2完掘状況(南から)
- G SE-3完掘状況(南から)
- H SE-4完掘状況(東から)

図版8

- A SE-5完掘状況(西から)
- B SE-6完掘状況(西から)
- C SD-3~5完掘状況(南から)
- D SD-6完掘状況(南から)
- E SX-2完掘状況(南から)
- F SK-2完掘状況(西から)
- G SK-6完掘状況(南から)
- H SK-14・15完掘状況(北から)

図版9 出土遺物(1) SI-1-3

図版10 出土遺物(2) SI-3

図版11 出土遺物(3) SI-5・6

図版12 出土遺物(4) SK-22、SX-3、

調査区内出土遺物(縄文土器)

図版13 出土遺物(5) 調査区内出土遺物
(須恵器)

I はしがき

1. 調査に至る経緯と経過

栃木県宇都宮市東谷町インターパーク58街区において、株式会社福田屋百貨店によるインターパークビレッジの建設が計画された。当該地は、独立行政法人都市再生機構（旧、都市基盤整備公団）が行っている宇都宮都市計画事業、東谷・中島土地区画整理事業地内に所在し、現在、福田屋インターパーク店が営業している店舗の北側にある第2駐車場の一部が今回の事業予定地である。しかしながら当該地区には「立野遺跡」（遺跡No448）が存在しており、平成7～9年に（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによって確認調査が行われ、その後立野遺跡1～8区として発掘調査が実施されている。しかし今回の建設予定地の様な駐車場部分に対しては、盛土整地による遺跡の現状保存の方法が取られているため、開発に際しては遺跡の未調査地区として発掘調査が必要となった。

調査は、事業主である独立行政法人都市再生機構より委託を受けた㈱日本窯業史研究所が、宇都宮市教育委員会の指導のもと実務にあたった。野外調査は平成17年4月21日から開始し、面積約2360㎡を調査した。確認した遺構は、古墳時代の竪穴式住居跡5軒、土坑3口、溝跡1条、中世又はそれ以降と考えられる方形竪穴3基、井戸跡6基、土坑22口、溝跡8条、性格不明遺構2基等である。遺物は、縄文時代の石器や土器片、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器、須恵器が出土し、さらに石製模造品、白玉、中世の渡来銭（中国産）、磁石と言った遺物も少量出土した。その後、5月12日には宇都宮市教育委員会の立会いを受け、6月4日にはすべての野外調査を終了した。遺物の整理及び報告書の作成作業は平成17年11月まで行った。

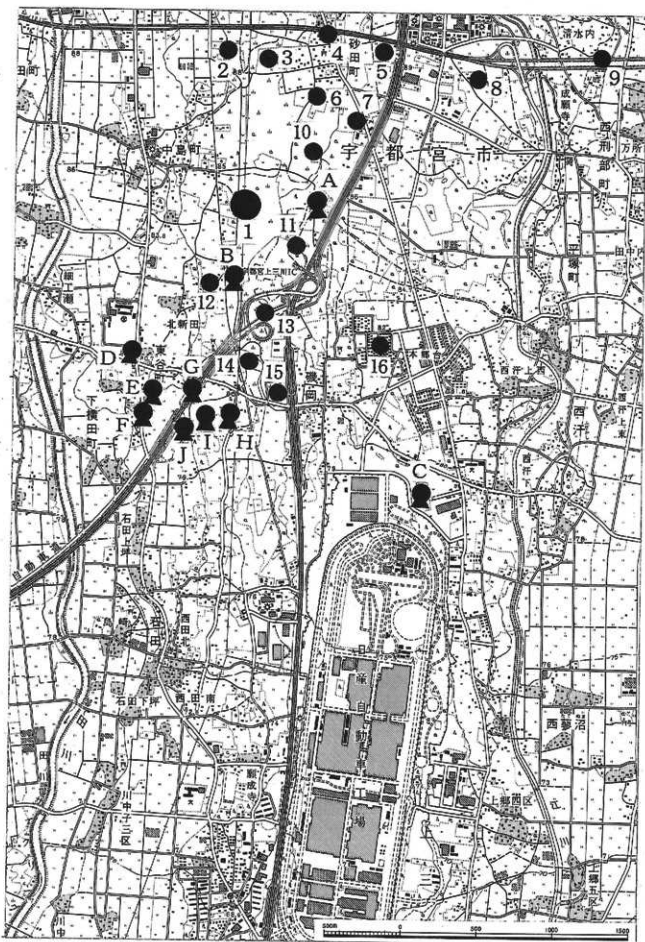
2. 遺跡の位置と環境

立野遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県のほぼ中央部に位置している。北には、日光から那須に至る山々を臨み、それらを水源とする鬼怒川や田川をはじめ、合流する中小の河川が形成した複合扇状地に立地している。市内にはこうした河川の侵食や火山灰の堆積によって、宝積寺台地、岡本台地、田原台地、宝木台地等の南北に延びる細長い台地とそれに伴う低地が形成されている。さらに市の北部には宇都宮丘陵（標高160～200m）が広がり、河内町の高館山を北端として市内中心部の八幡山公園に向かって延びている。この丘陵の基盤は凝灰岩や砂岩等から成っており、比較的柔らかい凝灰岩は長岡石とも呼ばれ、所々に露頭が見られる。また市の南部は関東平野に連なる緩やかな地形が続き、市街地を離れると水田・畑といった農耕地が広がり、ナラ・クヌギ等の平地林も点在している。

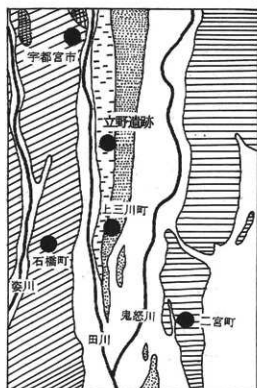
立野遺跡は、こうした宇都宮市の南部域、東谷町インターパーク58街区に所在する。近年、本地区及び周辺地域は、独立行政法人都市再生機構による大規模な土地区画整理事業が行われてきており、現在も大型商業施設や住宅地建設等の土地開発が進んでいる。また周辺交通網の整備も進み、北に宇都宮環状線、東側は国道新4号バイパス、南側に隣接する上三川町大字磯岡には、北関東自動車道上三川インターチェンジが建設される等、交通の結節点となっており、近年その景観は急速に様変わりしつつある。

3. 周辺の遺跡（第1図、第1表）

立野遺跡は、標高86m付近の田原台地上に立地する。本跡の所在する宇都宮市南部及び上三川町北部にあたるこの地域は、台地の中央や縁辺部を利用した、古墳～奈良・平安時代を中心とした遺跡の密集した地域として知られている。ことに、近年においては、北関東自動車道路の建設工事や独立行政法人都市再生機構による土地区画整理事業も行われてきており、それらに伴う発掘調査によって、東谷・中島地区では10カ所の遺跡と2カ所の古墳群が確認されている。今回調査を行った立野遺跡も当該区内に位置している。また周辺地域においても、道路整備や住宅開発等により本遺跡と同時期の集落跡や古墳群が調査されている。周辺の主な遺跡を第1図、第1表に示した。



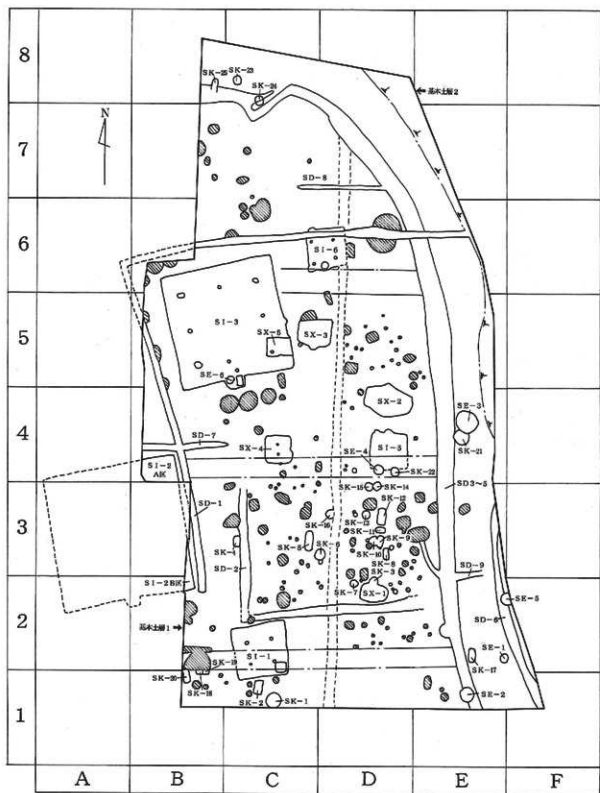
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 宇都宮市周辺の地形図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時期	No.	遺跡名	備考	
1	立野遺跡	集落跡	縄文～中世	A	琴平塚古墳群	前方後円墳1基、円墳6基、 墳形不明2基他	
2	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		B	桜稻荷古墳	円墳
3	砂田滝遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		C	西赤堀孤塚古墳	前方後円墳
4	砂田東遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		D	双子塚古墳	前方後円墳
5	上横田A遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		E	笹塚古墳	前方後円墳
6	砂田姥石遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		F	鶴舞塚古墳	円墳
7	西利部西原遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		G	原古墳群	円墳8基
8	大岡台遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		H	車塚古墳群	円墳5基
9	成願寺北遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		I	権現山古墳群	円墳3基
10	中島笹塚遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代		J	松の塚古墳	円墳
11	磯岡北遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代				
12	東谷権現山北遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安時代				
13	杉村遺跡 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ～Ⅷ区	集落跡	弥生～奈良・平安時代				
14	杉村遺跡 Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ区	集落跡	弥生～奈良・平安時代				
15	磯岡遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安時代				
16	西赤堀遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代				



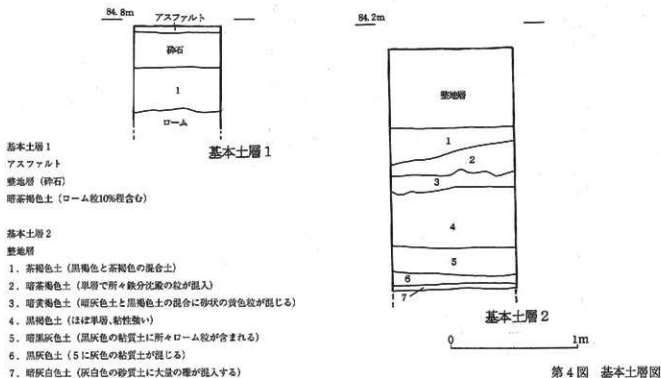
第3図 調査区全体図

4. 調査の方法と標準土層 (第3・4図)

調査区は、建設工事によって遺構が影響を受けるであろうと考えられる約2360㎡の面積が対象地である。現況は駐車場として利用されており、30～50cm程の厚さで盛土整地とアスファルトの舗装が行なわれていた。調査は、遺構を確認出来る面までの表土除去を重機で行うと共に、終了した部分から人力で遺構の確認作業を開始した。

作業は遺構の確認作業の後、確認状況の写真撮影、個々の遺跡の完掘調査及び完掘写真撮影と図面の実測作業、住居跡ならびにカマドの完掘及び図面の実測作業、調査区全体図の作成、レベルの計測、完掘全景写真の撮影等を行った。また、調査区全体に調査の基準となるグリッド杭を10×10mの方眼状に設置した。国家座標 (第Ⅱ系) グリッドA-1の座標数値は、Y軸Aが6840m、X軸1が54300mである。尚、グリッドの南北軸は座標北を示しており、実測図上の北の方位もこれを示す。

調査区は、大部分が台地もしくはその縁辺上に位置している。表土は、部分的にほとんど遺存しない場所もあるが、平均すると整地層の30～40cm下が遺構確認面となっていた (第4図)。標準層序は、調査区南西域の台地上と北東域で確認した埋没谷の落ち込み部分 (第3図) の土層を表記した。基本土層1は前述の様に整地層の下で40cm程の耕作土層が遺存し、その下が地山のローム層となる。基本土層2は、整地層の下に厚さ20～40cm程の旧水田の耕作土、その下の3～6層は粘性の強い埋没谷の堆積層となり、7層が砂・礫を大量に含む暗灰色の基盤層となる。



II 遺構と遺物

古墳時代

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は、住居跡5軒、土坑3口、溝跡1条である。その中で、S I - 2・3は調査された住居跡としては県内でも1、2位の規模の大型住居跡である。また千鳥状に並んでいるS I - 2の東壁側とS I - 3の西壁側の間を接近して、通り抜ける様に南北に延びるSD-1を確認したが、S I - 3の北西側においてはほぼ直角に東へ折れ曲がり、S I - 3の北壁と並行する形で延びていた。

以下それぞれ遺構ごとに記す。

1. 竪穴式住居跡

SI-1

遺構 (第5・6図、図版2)

調査区南西隅のC-1・2区に位置し、本住居の北西約6mにSI-2がある。

平面形は東西約5.6m、南北約5.8mの北東隅が若干張り出した正方形である。カマドを通る軸線はN-81°-Eである。尚、本住居跡の南側は確認調査時のトレンチ掘削によって、床面及び西壁下の周溝の一部が失われていた。壁は高さ9~12cmが遺存し、床面より外傾気味に立ち上がる。周溝はD1・2があり、D1は東壁下で約1.2m確認した。D2は北東隅から北・西・南壁下を巡って、東壁に施設されたカマド南側袖の手前で止まっている。いずれも、幅15cm前後、深さ約5cmで、断面形は逆台形状を示す。床面はほぼ平坦で、北側は4~5cmの薄い貼り床である。柱穴はP1~P4の4口を確認し、住居の対角線上にほぼ四角に配されている。平面形はP1・P4が楕円形、P2・P3が円形で、大きさはP1が40×34cm、深さ49cm、P2が30×25cm、深さ48cm、P3が30×27cm、深さ46cm、P4が30×28cm、深さ42cmで、P2・P3の平面形及び深さは、いずれも旧トレンチ底面からの遺存計測である。また貯蔵穴は南東隅で確認されたP5である。平面形は117×108cmの隅丸方形で、底面はほぼ平坦、壁は外傾しつつ立ち上がる。深さ38cmである。また小穴のP6・P7は貼床を除去後に確認され、大きさはP6が径18×25cm、床面からの深さ15cm程、P7が径15×25cm、床面からの深さ15cm程で、共に平面形は楕円形であった。埋積土は自然埋没で、3層に榛名二ツ岳決川テフラ(Hr-FA)の堆積が認められた。

カマドは東壁中央部の若干北寄りに施設され、両袖が残るが遺存状態は悪い。カマド袖は灰色粘土で築かれており、カマド手前に粘土塊と、火床の手前部分の両袖に渡して庇として使用したと思われる凝灰岩片が残されていた。規模は最大長40cm、最大幅88cmである。

遺物は、完形の埴1が東壁と貯蔵穴の間の床面で、6がP4付近で確認した灰色粘土堆積の周辺で出土した。またカマドの南袖の手前と貯蔵穴内より甕片が出土しているが、いずれも体部片のみで口辺部の出土が無いため、形状は不明である。

遺物 (第6図、図版9)

図示し得た遺物は、いずれも土師器で、埴が3点、坏2点、甕1点、壺1点である。この他に凝灰岩の切石片が1点出土したため図示した。

1は口径11.8cm、器高6.4cm、丸底で半球形をした形状の埴である。整形は、外面の口辺部遺存状態が良くないがヘラ磨きと思われ、体・底部は下半ヘラ削り。体部には部分的に斜位のヘラ磨きを加えられる。内面は器面の剥離が著しく判断不明である。胎土は径1~2mmの長石や砂粒を含む。色調は外面が明赤褐色、内面が黄灰色である。

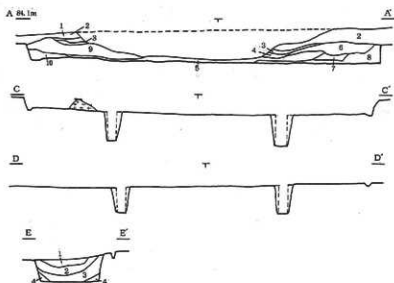
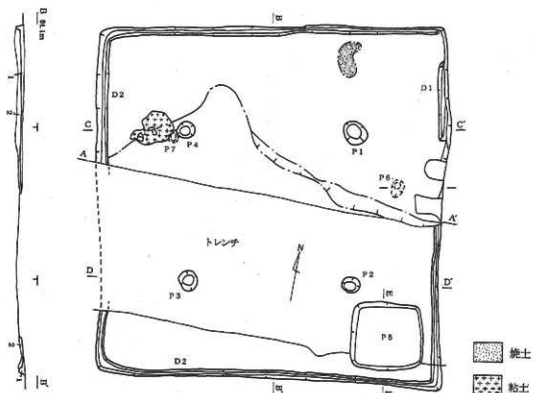
2は復元口径15cm、整形は内外面いずれもヘラ磨きを施す。胎土は微砂粒をわずかに含むが、精選された粘土を用い、色調は内外面とも明赤褐色である。

3・4はいずれも復元口径13cm。4の器高が4.5cmで、整形は3の内外面がヘラ磨き、4は口辺部内外面が横のヘラ磨き、体底部は外面がヘラ削り、内面が縦・斜位のヘラ磨きを施す。胎土は3・4いずれも精選された粘土を用い、色調はいずれも赤褐色ないし明赤褐色である。

5は鉢の口辺部と思われる。

6は復元口径13cm、遺存器高が9cmで、整形は口辺部内外面が横ナデ、体部外面は器面の状況が良くないが、ヘラ削り。内面はヘラ撫で付けである。胎土は砂粒を含み、外面は被熱により煤けて黒い。

7は底部で、整形は蹄状工具により縦・斜位に施す。底部は剥離が著しく、胎土は黒雲母を含み、外面の色調は明赤褐色ないし、にぶい橙色である。



A-A'

1. 黒褐色土 (耕作土)
2. 黒褐色土 (粘性あり、やわらかい)
3. 灰黒色土 (しまりあり、FA混入)
4. 灰黒色土 (今市PM少量混入)
5. 黒灰色土 (粘土・焼土粒を含む)
6. 灰色土 (粘土・焼土粒を含む)
7. 凝灰岩 (熱を受けボロボロ、カマド構築材)
8. 赤褐色土 (焼土を多く含む)
9. 黒色土 (粘性あり、ロームブロックを含みやや硬い)
10. 黄色土 (ロームブロックを多く含む)

B-B'

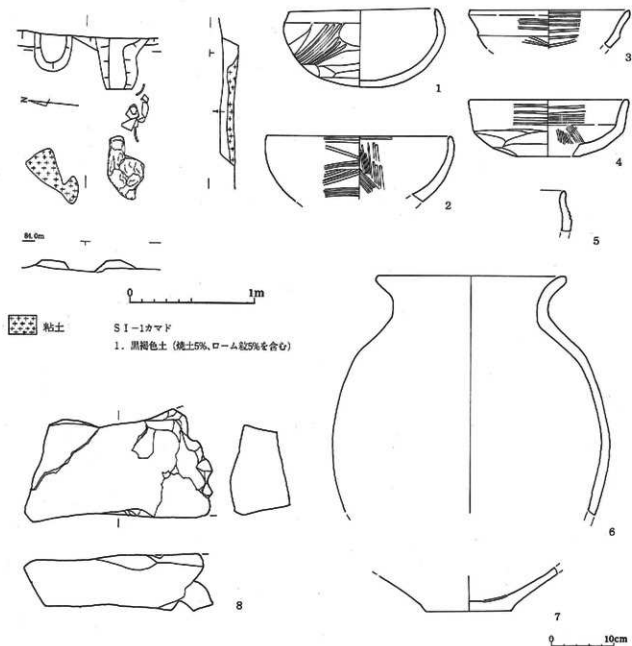
1. 黒褐色土 (所々にローム粒が混入)
2. 明黄褐色土 (黒色土とローム粒・塊の混合、盛り方)

E-E'

1. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊少量混入)
2. 黄褐色土 (ローム粒・塊を多く含む)
3. 黒褐色土 (ほぼ単層)
4. 黄褐色土 (褐色土とローム粒・塊の混合)

0 2m

第5図 SI-1



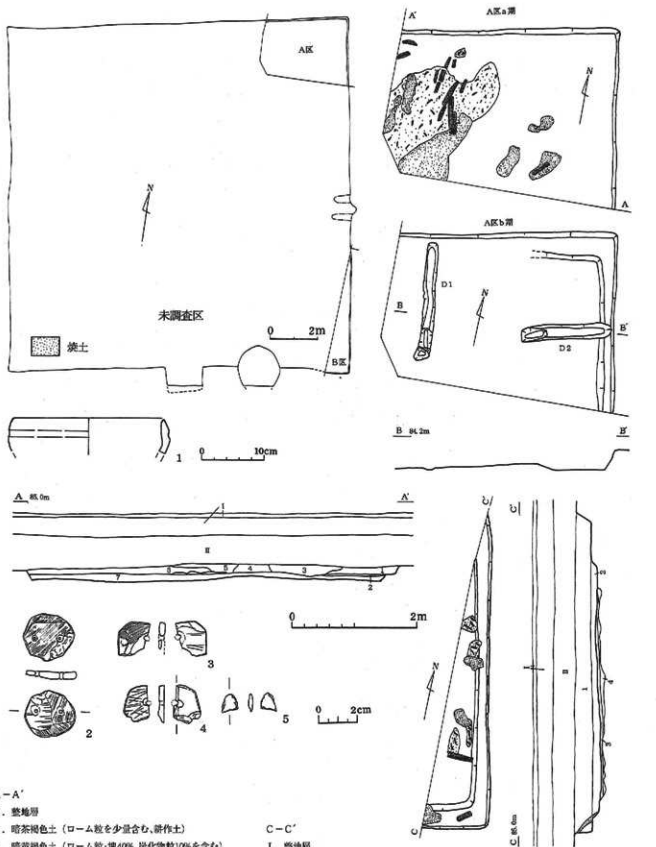
第6図 S I-1カマド・出土遺物

S I-2

遺構 (第7図、図版2)

調査区南西側のA・B-2・3・4区に位置する。住居跡の北東隅と南東隅を含む2カ所をそれぞれ調査した。その他の部分は、西側の調査区域外に位置するため、部分的な調査となったが、本跡は(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによる2000年度の確認調査ですでに発見されており、その際に平面規模の確認作業が行われている。本跡の東壁に沿うようにS D-1が北西方向に延びる。

平面形は、確認調査によると東西約14.5、南北約14.5mの方形で、南側に張り出しピットを持ち、東壁のほぼ中央にカマドを設置すると報告されているが、今回の調査区は、住居東壁側の2カ所、住居面積の5%程を調査したのみであり、南北長約15mを確認したに留まった。尚、調査した北東隅をA区、南東隅をB区として記述する。



A-A'

I. 整地層

II. 暗茶褐色土 (ローム粒を少量含む、耕作土)

1. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊40%,炭化物粒10%を含む)

2. 暗黒褐色土 (ほぼ単層)

3. 暗茶褐色土 (ローム粒・塊15%,炭化物粒10%含む)

4. 暗茶褐色土 (ローム粒5%,焼土・炭化物粒5%含む)

5. 暗茶褐色土 (ローム粒2~3%,焼土微量を含む)

6. 暗黄茶褐色土 (ローム粒・塊15%,焼土・炭化物粒10%を含む)

7. 黄褐色土 (茶褐色土とローム粒の混合物)

C-C'

I. 整地層

II. 暗茶褐色土 (ローム粒を少量含む、耕作土)

1. 暗黄茶褐色土 (ローム粒・塊15%,焼土・炭化物粒5%含む)

2. 暗茶褐色土 (ローム粒・塊20%を含む)

3. 暗黒褐色土 (ほぼ単層)

4. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊と黒褐色土の混合、住居廻り方)

第7図 SI-2・出土遺物

A区は床面が2層確認され、改造が行われたものと考えられる。新しい方をa期、古い方をb期とした。

a期は、壁の高さ約10cmで外傾しつつ立ち上がる。床面はほぼ平坦である。西側には炭化材、焼土が多量に認められ、焼失家屋と考えられる。尚、床面では確認することが出来なかったが、a期の壁より内側に延びた2条の間仕切り溝、D1・D2がある。D1は長さ約19m、幅15~20cm、南側の2カ所で浅いピットを接続し、深さはb期の床面から約4cm。南側のピットは7~8cm。D2は東壁に接し、長さが約15mで、幅は24cmとD1より広く、やはり西端にピットを持つ。深さはb期の床面より溝側で8cm、ピットは18cm程である。

b期は、a期の北壁側が約40cm、東壁側が15~20cm内側に入った部分で、a期床面との高低差は約10cm。床面は若干の起伏を持つ。

B区はS I-2の南東部分にあたり、南東隅を含む。A区と同様に床面の段差が認められ、改造を行ったと判断される。新しい方をa期、古い方をb期とした。

a期は、壁の高さ20cm前後で、ほぼ直立しており、床面はほぼ平坦である。A区程は多くないが、本区でも炭化物及び焼土が出土した。

b期はa期の床面よりも17~20cm低く、この部分の壁はやや外傾する。床面は締まった硬い層に掘り込まれており、床面は起伏を持つ。

遺物 (第7図、図版9)

図示し得た遺物は、A区の埋積土中から出土した坏1点と石製模造品4点である。その内石製模造品4、5は、先の確認調査で多量の石製模造品の出土が報告されている事から、住居の埋積土を諷いにかけて精査したところ、A区の埋積土より2点確認した。

1は坏の小片で、復元口径12cm。整形は内外面いずれも磨きで、胎土は精選された粘土を用いている。色調はにぶい橙色である。

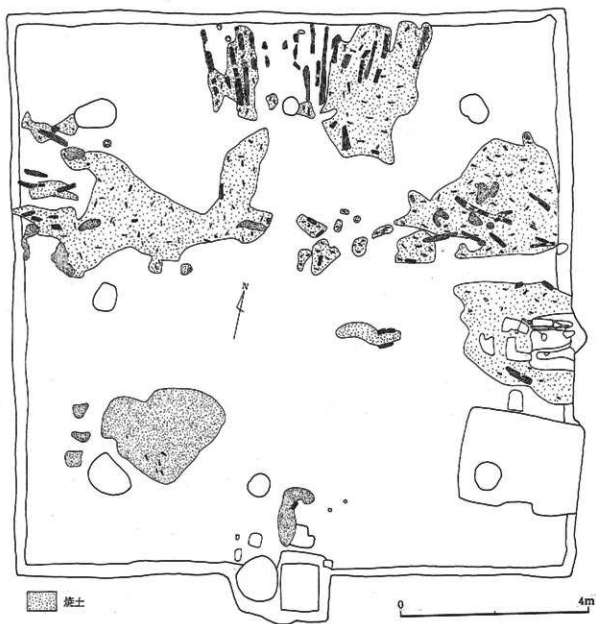
2~5は滑石製の模造品で、2~4は有孔円板である。2が双孔、3・4も双孔と考えられるが欠損しており、単孔しか確認出来ない。5は有孔円板の破片と思われる。大きさは2が 27×25 mm、厚さ4mm、重さ3g。3が現存長 15×18 mm、厚さ3mm、重さ1g。4が現存長 14×19 mm、厚さ3mmで重さ1gである。

S I-3

遺構 (第8~11図、図版3~5)

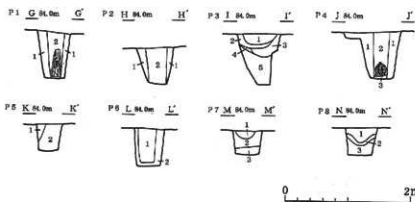
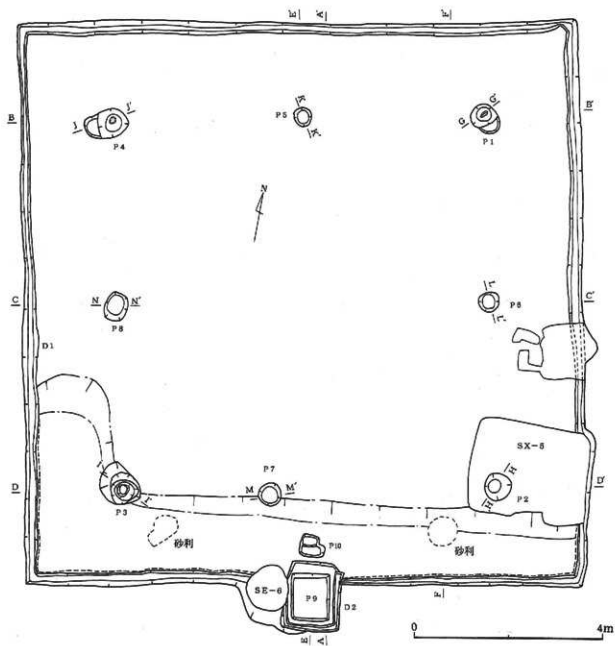
調査区西側のB・C-5・6区に位置する。本跡の南西約7mにS I-2、南側約25mにS I-1、東側約4mにはS I-6がある。この内、S I-1~3の3軒は千鳥状の配列が看取出来た。またS D-1が本跡の北西隅で直角に折れて西壁と北壁を囲むように東へ延びていた。

平面形は東西約120m、南北約119mの正方形である。東壁のやや南寄りにカマド、南壁中央に張り出しピットがある。この2カ所の壁はカマドが若干、張り出しピットは大きく突出する。カマドを通る軸線はN-76°-Eである。壁は高さ25~40cmが遺存し、床面より外傾気味に立ち上がる。壁溝はD1が、南側の張り出しピットの部分で一旦途切れるが、他はカマド部分も含めて圍繞していた。幅15~35cm、深さ約5cmで、南壁内側の壁は内傾していた。床面はシルト質の硬く締まった層に掘り込まれ、ほぼ平坦である。貼り床はP2とP3の南辺を結んだラインから南壁までの15~20mの範囲で行われており、西壁側で若干北側に広がる。また、南東壁で住居の荒掘りに伴った先端に丸みを持った工具痕が良く残っており、鋤等を使用したものと考えられる。柱穴は8口が認められた。その内P1~P4の4口が主柱穴で、住居の対角線上に四角形に配されている。P5~P8はP2とP3間のP7が、中間やや西寄りに配されている他は、それぞれの主柱穴のほぼ中間に配された補助柱穴である。規模はP1が

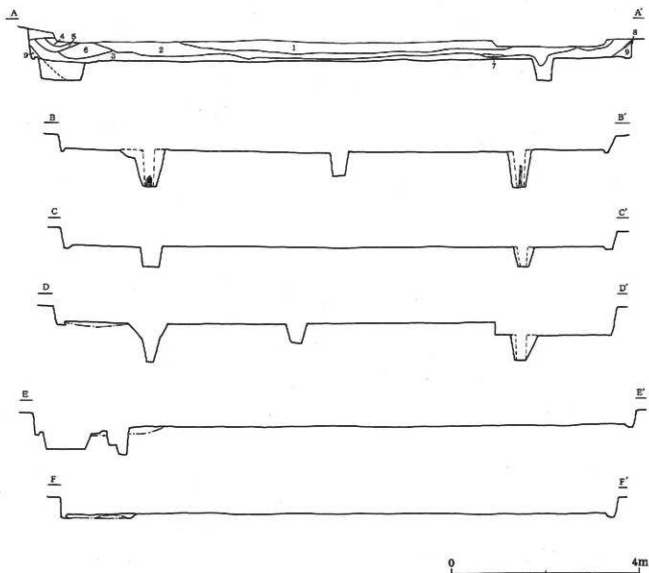


第8図 SI-3炭化物・焼土範囲

60×52cm、深さ75cm、P 2が60×55cm、深さは重複するSX-5の底面より50cm、P 3が90×80cm、深さ55cm、P 4が55×30cm、深さ50cm、P 5が60×52cm、深さ75cm、P 6が60×55cm、深さ50cm、P 7が90×80cm、深さ55cm、P 8が55×30cm、深さ50cmである。主柱穴の4口は補助柱穴に較べると大型で深い。P 1・P 4は柱根の下部が遺存しており、薄く灰色の粘質土が敷かれた上に柱が認められ、P 1～P 4の下層は砂利の基盤層に届いていた。P 2・P 6は柱根痕跡が残り、P 3は、土層を観察すると柱の抜き取りが北西側に行われていた。さらにP 2・P 3の掘り方の掘り下げは住居の荒掘り時と並行して実施されており、掘り方に柱を立てた後に掘り方を埋めた砂利の残りが、P 2の南西側に65×63cm、P 3の南東側に75×53cmの範囲で、いずれも厚さ5cm程が締まって硬化した状態で残されていた。P 10は出入口施設に関連するピットと考えられ、張り出しピットの北側で、ほぼ南北軸の軸線上に位置する。東西方向に長軸を持ち、長方形の西側辺をそろえて2段に重ねた形状を示している。



第9图 SI-3平面图·柱穴土层图



G-G'

1. 淡黄褐色土 (ローム粒・塊が大半、少量の黒褐色土が混入)
2. 黒褐色土 (ほぼ草屑でしまり弱い、木柱の遺存あり)

H-H'

1. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊が大半、少量の黒色土が混入)
2. 暗黒黄褐色土 (ローム粒20%、5cm程度の礫多量に混入)

I-I'

1. 暗茶褐色土 (ローム粒30%、炭化物粒若干混入)
2. 黒褐色土 (ローム粒10%、炭化物粒若干混入)
3. 暗黄褐色土 (ローム粒20%混入)
4. 暗黄茶褐色土 (ローム粒30%、2~3cm程の礫が混じる)
5. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊と黒褐色土の混合)

J-J'

1. 淡黄褐色土 (ローム粒・塊が大半、黒褐色土が少量混入)
2. 黒褐色土 (ほぼ草屑、木柱の遺存あり)

K-K'

1. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊が大半)
2. 黒褐色土 (ほぼ草屑、炭化物粒を少量含む)

L-L'

1. 淡黄褐色土 (ロームが主体で硬くしまる)
2. 黒褐色土 (ローム粒10%、炭化物粒を少量含む)

M-M'

1. 黒褐色土 (ローム粒20%混入)
2. 淡黄褐色土 (ローム粒・塊が大半)
3. 淡黄褐色土 (2よりも硬くしまる)

N-N'

1. 暗茶褐色土 (ローム粒20%混入)
2. 暗黄褐色土 (黒褐色土とローム粒の混合)
3. 淡黄褐色土 (ローム粒・塊が大半、少量の黒褐色土を含む)

S I - 3

A-A'

1. 黒褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗茶褐色土 (塊土・ローム粒を少量含む)
3. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊を少量含む、しまりあり)
4. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊を多く含む、塊土及びFA少量混入)
5. 黒褐色土 (ローム粒少量含む、FA少量混入)
6. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊多量含む、FA少量混入)
7. 暗褐色土 (ローム粒・塊多量含む、しまりあり)
8. 黒色土 (ローム塊を少量含む、FAの混入が多い)
9. FA層

第10図 S I - 3土層断面図

東西長は南側で50cm、北側で35cm、南北長45cmで、深さは北側が深く50cm、南側が30cmである。張り出しピットは、南壁の中央を外側へ約1m長方形に掘り込んでおり、この張り出した内側に溝を「コ」字状に配したと思われるD2が巡るが、西側部分は井戸跡との重複によって確認出来なかった。溝の幅は10~18cm、深さ約6cm。溝に囲まれた内側は床面より5cm程低く掘り込まれ、その内側がP9となる。平面形は103×80cmの長方形である。底面はほぼ平坦で、壁は北側が僅かに外傾するが、他の3壁はほぼ直立する。深さ35cmである。尚、痕跡等は認められなかったが、おそらく溝には板をはめ込んで板を渡し、穴の上には蓋をし、貯蔵穴として使用されたものと考えられる。埋積土は自然埋没で、3層に榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の堆積が認められた。

カマドは東壁の中央から若干南寄りに施設されていた。規模は118×120cmで、両袖は凝灰岩の切り石や割石を芯とし、この上に板状の切り石を左右の袖の上に2枚渡して構築していたものであるが、いずれも北側の袖に近い所で縦割れをおこしており、左側は斜行、右側は袖からずり落ちた状況であったため、確認当初は、あたかも床面に平石を敷いたように(第11図)見受けられた。また、この左右の袖に渡した板状の石の上には、焼けた粘土、炭化物、焼土、土器等が残されていた。さらにカマド手前には凝灰岩製の「コ」の字状に削り貫いた切り石が倒壊しており、復元すると、高さ50cm、幅70cm、厚さ20cm程で、「コ」の字状の削り抜き部分は幅40cm、高さ30cm程である。

本跡は、北壁付近に炭化材が南北向きに、東西両壁の中央から北側にも炭化材が東西向きに認められ、それらに伴い焼土も広範囲に認められる焼失家屋であるが、南側に関しては焼土が認められるものの、炭化材の出土が北側に比べ極端に少ない。出土した土器は、土器器に少量の縄文土器片が混じる。埴1は底部がカマドの天板の上に在り、体部片はその周辺に散乱していた。また北壁側の床面付近で埴5・6が炭化材の間から、この東側に埴2が、やはり炭化材の間から出土した。南壁側では床面より浮いた状態で10の高坏が出土したが、焼失家屋としては極めて土器の出土量が少ない。また、張り出しピット東側のD2より滑石製の白玉が2点出土した。さらにカマドの南袖の手前と貯蔵穴内より甕片が出土しているが、いずれも体部片のみであるため、全体の形状は不明である。

遺物(第12図、図版9-10)

図示し得た土器は、いずれも土器器で、埴が2点、坏5点、高坏2点、甕2点、この他には滑石製の白玉2点である。

1は口径15cm、器高6.8cmの丸底で、体部の張りが強く、口辺部は直線的に立ち上がる。整形は、口辺部の内外面横ナデ、体・底部は外面へら削り、内面はへら磨きで、胎土に白色砂粒を含み、色調は明赤褐色である。

2は口径14.1cm、器高5.4cm、丸底で、口辺部は外彎気味に立ち上がる。整形は、口辺部内外面へら磨き、外面体・底部はへら削りの後にへら磨き、内面の体・底部は被熱により器面の剥離が著しいがへら磨きと思われ、胎土に粗砂粒を若干含む。色調は明赤褐色で、外底部に黒斑がみられる。

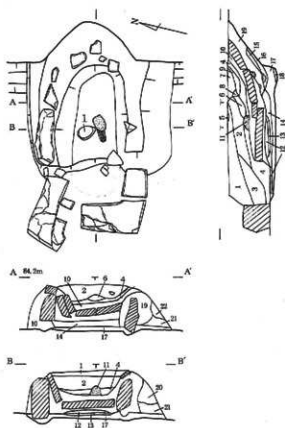
3~6はいずれも丸底で、体部との境に稜を持ち、ほぼ直線的に立ち上がっている。口径及び器高は、3が11.7cm、4.7cm。4が復元口径12cm、同器高6.0cm。5が12.3cm、5.3cm。6が12.7cm、4.8cmである。3・5・6の整形は口辺部の内外面へら磨き、体・底部は外面へら削り、内面はへら磨きで、胎土に粗砂粒を含み、4は全面へら磨きである。色調は3・5・6の内外面は赤褐色~明赤褐色、3の底部に黒斑がみられ、4はにぶい橙褐色である。

7は体部との境に稜を持つ。口辺部は内傾しつつ立ち上がる。口辺部内外面へら磨きである。色調は内外面とも明赤褐色である。

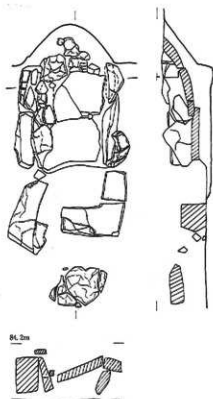
8・9は高坏の脚上部で、外面の整形は、8がへら磨き、9がへら削りで、胎土に粗砂粒を僅かに含み、色調は8・9ともに赤褐色である。

10・11は甕の底部である。

12・13は滑石製の白玉で、大きさは、12が径8×7mm、厚さ3~4mm、孔径2mm、13が径7mm、厚さ2~4mm、孔径2mmである。



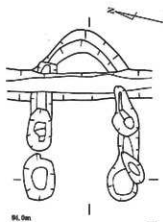
A 天井陥没後の確認状況



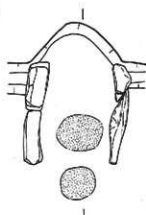
B 粘土除去後の凝灰岩確認状況

S I-3 カマド

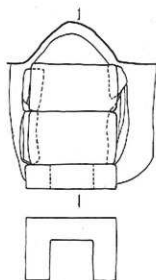
- | | | |
|---------------------------|-------------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土 (ローム粒10%含む) | 9. 灰褐色粘土 (ローム粒を少量含む) | 17. 黒色土 (ローム粒を含む) |
| 2. 黒褐色土 (ローム、焼土粒を5%含む) | 10. 灰黄褐色粘質土 (ローム粒を5%含む) | 18. 灰褐色粘質土 (ローム粒を含む) |
| 3. 黒褐色土 (炭化物、灰色粘土を5%含む) | 11. 焼土 | 19. 灰黄褐色粘質土 (焼土粒、凝灰岩屑を含む) |
| 4. 黒褐色土 (ローム粒、灰色粘土を5%含む) | 12. 黄褐色粘質土 (焼土を含む、火床) | 20. 灰褐色粘質土 (ローム粒を含む) |
| 5. 黒褐色土 (焼土40%含む) | 13. 褐灰色粘質土 (焼土を含む) | 21. 褐灰色土 (炭化物、焼土粒少量、ローム5%含む) |
| 6. 黒褐色土 (ローム粒10%含む) | 14. 灰黄褐色粘質土 (凝灰岩屑を少量含む) | 22. 黒褐色粘質土 (ローム粒、塊少量含む) |
| 7. 黒褐色土 (ローム粒、灰色粘土を50%含む) | 15. 黒褐色土 (焼土粒を含む) | |
| 8. 灰褐色土 (ローム塊、炭化物粒を含む) | 16. 灰黄褐色粘質土 (焼土粒を含む) | |



C カマド掘り方



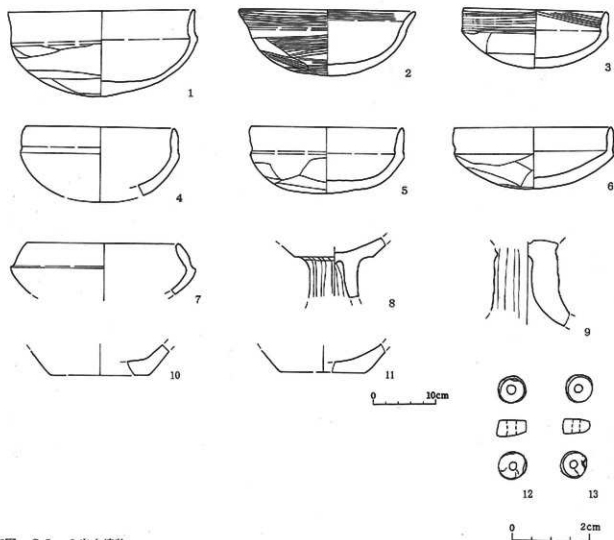
D カマド完備状況



E 復元図

0 1m

第11図 S I-3 カマド



第12図 S I-3 出土遺物

S I-4

本跡は、2000年度の(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターのトレンチによる確認調査では、住居跡として報告されており、今回の調査でも平面を確認した当初はS I-4とし、住居跡として掘り下げたが、調査の結果、中世以降の方形竪穴と確認されたため、欠番としてS X-4の項で報告する。

S I-5

遺構(第13図、図版5)

調査区東側のD-4区に位置する。本跡の南西側約19mにS I-1、西側約21mにS I-2、北西側約11mにはS I-3がある。S K-22、S E-4と重複するが、切り合い関係は不明である。平面形は東西約37m、南北推定38mの方形と考えられる。北西隅と西側に若干張り出す部分が認められるが、擾乱によるものと考えられ、南壁及び床面も確認調査時の旧トレンチによって失われていた。壁は高さ13~15cmが遺存し、外傾しつつ立ち上がる。床面はほぼ平坦である。壁溝、柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。また、中央やや北東寄りの床面近くに61×26cmの楕円形で、厚さが5cm程の焼土が遺存する面を確認したが、炉跡では無い。さらに住居東壁付近の埋積土にも焼土が混入している層が認められたため、カマドを想定し追求したが確認出来なかった。

遺物は、完形の土師器環1が東壁際で出土した他は、北西側から石製の紡錘車が1点出土した。

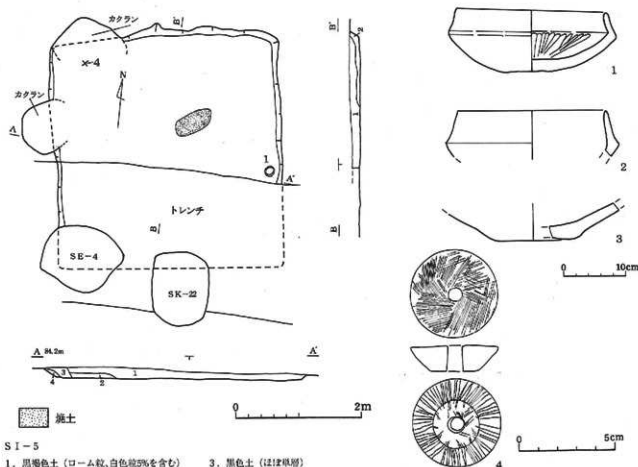
遺物 (第13図、図版11)

1は口径12cm、器高4.9cm、平底状の底部から体部は内彎気味に立ち上がる。体部との境には稜があり、口辺部は内傾していた。整形は、口辺部の内外面横ナデ、体・底部の外面は器面が荒れていて不明であるが、内面はヘラ磨き、胎土に粗砂粒、金・黒雲母を含み、色調は赤褐色である。

2は1同様の器形と思われる小片で、色調は赤褐色である。

3は壺の底部で、胎土は粗砂粒を多く含み、色調は赤彩されたものか、地の褐灰色の上に、にぶい赤褐色が底部及び体部下端で認められる。

4は滑石製の紡錘車で、大きさは上面径46mm、下面径25mm、厚さ14mm、孔径8mmで、重さは39gである。



第13図 SI-5・出土遺物

SI-6

遺構 (第14図、図版6)

調査区北側のC・D-6区に位置し、本跡の南西側約4mにSI-3がある。平面形は東西長が推定3.9m、南北長約4.2mの北西・南西隅が張り出した正方形であるが、西壁の南北両隅の張り出し部分は攪乱によるものと考えられる。また南壁中央やや西寄りに、外側へ約40cm突出した張り出しピットを持つ。尚、本跡北側はSD-1により床面の一部、東側は現代の排水溝によって床面及び東壁が失われていた。壁は高さ約13cmで、外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。柱穴はP1~P4の4口を確認した。規模はP1が25×23cm、深さ40cm、P2が33×27cm、深さ47cm、P3が30×27cm、深さ54cm、P4が28×28cm、深さ58cmである。P5は張り出しピットで、南壁側には2段の稜が付いて底面に至り、床面部分での平面形は90×80cmの楕円形になる。さらに底面は周辺

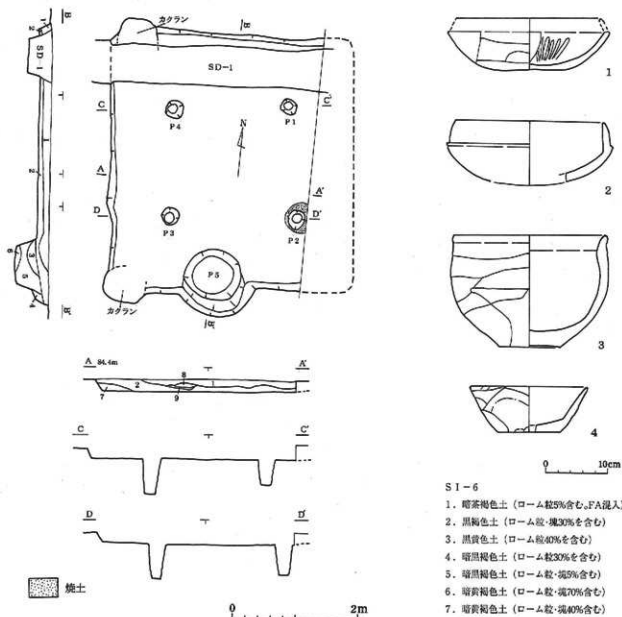
から中央に向かって僅かに深さを増し、その中央の深さは38cm程である。埋積土は自然埋没で、8・9層に榛名二ツ岳渋谷テフラ（Hr-FA）の堆積が認められた。遺物は破片が多く、図示し得たものは少ない。出土した土器はいずれも土師器で、坏2点、埴が1点、手捏ねの坏形土器1点である。南側のP5付近より1の坏、P2の南西側で3の埴が出土した。

遺物（第14図、図版11）

1・2は坏で、体部との境に稜を持ち、口辺部はいずれも内傾する。2は復元で口径12cm、器高5cm、丸底で半球形をした形状の坏である。整形は1の口辺部の内外面ヘラ磨き、1・2いずれも体・底部外面はヘラ削り、内面は放射状のヘラ磨きで、胎土は精製された粘土を用い、色調は赤褐色である。

3は埴で、復元口径12.4cm、器高8.9cmで、僅かに上げ底状の底部より内彎しつつ立ち上がる。深さがあり、整形は口辺部内外面が横ナデ、体・底部外面はヘラ削り、胎土は精選されたものを用い、微細な黒雲母片と石英を少量含む。色調は赤褐色である。

4は手捏ねの坏形土器で復元口径9.5cm、器高3.6cm、胎土は、精選された粘土を用い、色調は明赤褐色である。



- SI-6
1. 暗茶褐色土（ローム粒5%含む、FA混入）
 2. 黒褐色土（ローム粒・塊30%を含む）
 3. 黒黄色土（ローム粒40%を含む）
 4. 暗黒褐色土（ローム粒30%を含む）
 5. 暗黒褐色土（ローム粒・塊5%含む）
 6. 暗茶褐色土（ローム粒・塊70%含む）
 7. 暗茶褐色土（ローム粒・塊40%含む）
 8. FA層
 9. FA層（8よりも混入が多い）

第14図 SI-6・出土遺物

2. 土坑

本時期の土坑は、埋積土の状況からSK-1・21・22の3口が認められた。

SK-1

遺構 (第15図、図版6)

調査区南端に位置し、本跡の北側約2mにSI-1がある。平面形は東西173×南北165cmの円形で、壁は北東側が外傾気味に立ち上がり、北東、南側は僅かな内彎が認められる。深さ約50cmである。底面は荒掘り時の工具痕跡が認められ、特に南西側が顕著で、先端の丸い工具によって施されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SK-21

遺構 (第15図、図版6)

調査区南端に位置し、本跡の西側約5mにSI-5がある。SE-3と重複し、これに切られている。平面形は、東西185×南北174cmの円形で、壁は外傾する。深さ約60cm。底面は平坦で、中央部と北側に小穴を持つ。埋積土は自然堆積で2・3層に榛名二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA) の堆積が認められた。遺物は出土していない。

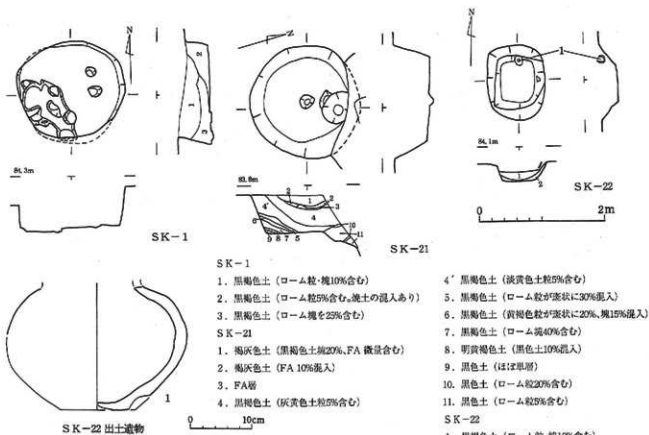
SK-22

遺構 (第15図、図版6)

調査区の東寄りに位置し、当初はSI-5の貯蔵穴が張り出しピットとも考えられたが、SI-5の南壁が遺存せず不明瞭なため、土坑として記述する。平面形は東西長92cm、南北長121cmで南側に丸みを持つ不正な隅丸長方形である。壁は外傾しつつ立ち上がり、東側を除く他壁には稜を持つ。深さは約60cmで、底面はほぼ平坦である。

遺物 (第15図、図版12)

遺物は北側で土師器の小型壺が1点出土した。頸部～口辺部及び底部を欠損する。器高9.7cm (残存高)、胴部径14.5cm (残存部最大径)。色調は淡赤褐色である。整形は、内外面とも磨耗や剥離が激しく明確ではない。



第15図 SK-1・21・22 出土遺物

3. 溝跡

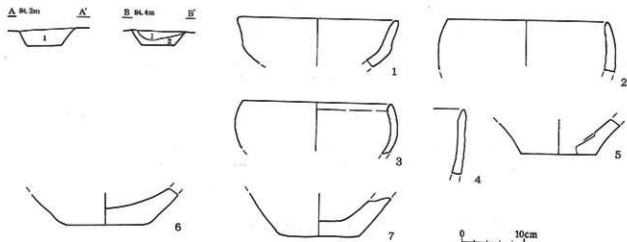
SD-1

遺構 (第16・21図、図版6)

南端が調査区の南西域、SI-2の東側に位置し、SI-2の東壁、SI-3の西壁と並行する形で北西方向に延びている。その先は調査区外に至るが、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによる2000年度の確認調査によってSI-3の北西域で、ほぼ直角に折れて、東進しているのが確認されている。東端は調査区東側で落ち込む埋没谷まで延びており、規模は幅80~110cm、深さ20~30cm前後である。またこの溝は、南西端がSI-2の南東隅とほぼ揃い、前述の様にSI-2の東壁と千鳥状に配したSI-3の西壁にも沿って延び、それらに一定の規則性が見られる事から、SI-2・3に伴う区画溝と推察される。遺物は埋積土中から土師器小片が出土した。

図示した遺物は、いずれも土師器の小片で、1が坏、2・3が埴、4が高坏の坏部と思われ、5~7が甕の底部である。遺物 (第16図)

- 1は、復元口径13cm。口辺部内面は横の磨き、外面横ナデ。胎土は精製された粘土を用い、色調は淡赤褐色である。
- 2は、復元口径13cm。口辺部内面は横のヘラナデ、外面は横のヘラナデ後に黒色処理を施す。
- 3は、復元口径12cm。口辺部内外面横ナデ、体部内面は横のヘラナデ、体部外面手持ちヘラ割り。胎土には精製された粘土を用い、色調は淡赤褐色である。
- 4は、口辺部内外面横ナデ、体部内面横ナデ後ヘラ磨き。胎土は精製された粘土を用い、色調は灰褐色である。
- 5-6は、体部内面ナデ、外面ヘラナデ、7は内外面ヘラナデ、5・7の底部外面ヘラ割りである。胎土は、5が砂粒、6が粗砂粒、黒雲母、7が石英、黒雲母を含む。色調は共に灰褐色である。



第16図 SD-1土器・出土遺物

中世以降

今回の調査では、古墳時代の遺構と共に中世~近世と判断される遺構も調査した。確認された遺構は、方形竪穴3基、井戸跡6基、溝跡8条、性格不明遺構2基、土坑22口である。

1. 方形竪穴

SX-3

遺構 (第17図、図版6・7)

調査区中央のC・D-5区に位置し、本跡の西側約1mにSX-5がある。遺構の北東側は時期不明の風倒木痕

により攪乱されている。平面形は東西に長軸を取り、東西35m、南北25mの長方形であるが、南側の入り口部分と、東西の壁が張り出していた。東西の張り出しには、柱穴のP1・2が認められ、この部分の長さは41mである。壁は、北壁がほぼ垂直、西壁は外傾しつつ立ち上がる。東壁は張り出して外傾した壁下の柱穴の左右に狭い段を持ち、南壁の東側は外傾しつつ東側の段から繋がる部分で段を持つ。さらに南壁の西側は、入り口部分の張り出しと、その西側に壁から3段のテラス状の段を伴っていた。床面は入り口部分の張り出しと、その西側の階段状の施設がP1の手前まで張り出しており、中央北側の部分にも荒掘り時の掘り方が認められたが、その他はほぼ平坦である。柱穴は、堅穴の中央を東西方向に並んで8口（P1からP8）とその北側に2口（P9、P10）を確認した。P1・P2は堅穴の東西壁の中央を外側に50~60cm程掘り込み作られていた。共に遺構確認面から掘り込まれており、深さはP1が87cm、P2が113cmである。P3~P10は床面に掘り込まれる。P6は、堅穴の中央に位置し、底面に敷石を敷いた形状からも、P1・2と共に主柱穴と考えられる。P3・4・7~10は側柱、P5は造り替えに伴い掘り込まれたと判断され、P4も平面形は長方形であるが、底面で段を持つ事から造り替えに伴って2口が重複している可能性を持つ。

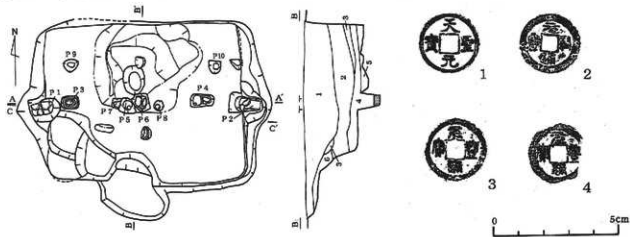
遺物（第17図、図版12）

床面の直上より渡来銭が4枚出土した。いずれも北宋銭である。

1は天聖元寶で初鑄年が1023年、寸法及び重さは、面径24mm、穿の一边7mm、重さ28g。

2は元祐通寶（初鑄年1086）で、寸法及び重さは、面径24mm、穿の一边6mm、重さ26g。

3、4は元豐通寶（初鑄年1078）で、面径は3が25mm、4が22mm（遺存長）、穿の一边は3が7mm、4が6mm、重さは3が28g、4が14g（遺存）である。



SX-3

1. 黒褐色土（ローム粒・塊10%含む）
2. 黒褐色土（硬質ローム（砂質性）塊を40%含む）
3. 黒褐色土（ローム粒を10%含む）
4. 黒色土（ローム塊5%含む）
5. 黒褐色土（硬質ローム（砂質性）塊を15%含む）
6. 黒褐色土（ローム塊10%含む）
7. 黒褐色土（ローム粒19%含む）
8. 黒褐色土（ローム粒20%含む）
9. 暗褐色土（淡黄色砂質土20%含む）



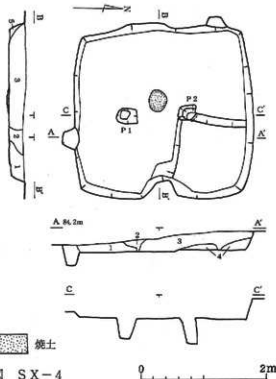
第17図 SX-3・出土遺物

SX-4

遺構 (第18図、図版7)

調査区中央付近のC-4区に位置し、本跡の北東側約10mにSX-3、北側約85mにSX-5が位置する。2000年度の(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによる確認調査で、南壁側が確認され、住居跡として報告されている。今回の調査においても平面確認をした当初は、住居跡と考えられたためSI-4としたが、調査の結果、完掘した際の形状及び埋積土の埋没状況等から考えて方形竪穴と判断し、SX-4として記載した。

平面形は東西2.8m、南北2.8mの東側を除く三方の中央付近が僅かに張り出した正方形である。壁は外傾しつつ立ち上がり、高さは約20cmが遺存する。東壁側中央に、壁が25cm程内側に入り込んだ部分が認められ、出入り口施設と考えられる。埋積土は、黒褐色土に多量のローム粒・塊を含み、人為的な埋め戻しと考えられる。また床面はほぼ平坦であるが、北東側1/4程の面は、他と比べると5cm程の高低差で平場状に1段高まった掘り残し面を持つ。柱穴はP1・P2の2口を確認した。規模はP1が33×25cm、深さ34cm、P2が30×24cm、深さ40cmで、平面形は共に隅丸方形である。尚、南壁と西壁にも2口の小穴が認められたが、本跡に伴うものではない。さらに本跡の中央付近には、平面形が径36×28cmの楕円形で、厚さ2cm程が赤褐色に焼けている焼土範囲が認められた。炉跡とも考えられたが、炉跡と断定するには、2口の柱穴に接近し過ぎている感も否めない。遺物は出土していない。



第18図 SX-4

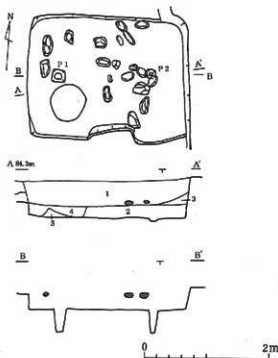
SX-4

1. 黒色土 (ローム粒・塊30%含む)
2. 黒色土 (黒褐色土塊30%、ローム粒・塊20%含む)
3. 黒褐色土 (黒色土とローム粒・塊の混合)
4. 黒褐色土 (黒褐色土塊20%、ローム粒・塊10%含む)
5. 黒色土 (黒褐色土塊20%、ローム粒・塊20%含む)

SX-5

遺構 (第19図)

調査区中央のC-5区に位置する。東側約1mにSX-3がある。本跡はSI-3と重複しており、SI-3を切っている。平面形は東西方向に長軸を取り、東西2.6m、南北2.0mの長方形である。壁は外傾しつつ立ち上がる。高さは東壁側で約60cm、SI-3と重複する他の三方で25~30cm程が遺存する。床面はほぼ平坦で、南壁の中央部には15cm程内側へ入り込んだ出入り口施設と考えられる掘り残し部分が認められた。柱穴は、平面形が方形のP1・P2の2口を確認した。規模はP1が21×20cm、深さ40cm、P2が15×13cm、深さ40cmである。埋積土には多量の自然石(川原石)が含まれていたが、遺物は出土していない。



SX-5

1. 黒褐色土（ローム粒20%含む）
2. 黒褐色土（ローム粒・塊10%含む）
3. 黒褐色土（ローム粒・塊30%含む）
4. 黒褐色土（ローム塊5%含む）
5. 暗黄褐色土（ローム塊50%含む）

第19図 SX-5

2. 井戸跡

SE-1（第20図、図版7）

調査区南東城のE・F-2区に位置し、南西側4.5mにSE-2がある。平面形は東西72cm、南北88cmの楕円形である。壁はやや外傾している。確認面からの深さ約140cmである。遺構に伴う遺物は出土していない。

SE-2（第20図、図版7）

調査区南東城のE-1区に位置し、北東側約4.5mにSE-1がある。SD-5と重複しており、これに切られている。平面形は東西135cm、南北138cmの円形である。壁は確認面から約60cmまでが外傾したロート状の断面を持ち、そこからは、ほぼ垂直に掘り込まれる。深さ220cmである。また壁の数カ所に掘り下げの段階で昇降用に利用したものか、断面が「く」字状の浅い掘り込み（B-B'）が認められた。底面はほぼ平坦である。遺構に伴う遺物は出土していない。

SE-3（第20図、図版7）

調査区東側のE-4区に位置し、西側にSD-5が隣接する。SK-21と重複し、これを切っている。平面形は東西236cm、南北245cmの円形である。壁は確認面から約75cmが外傾したロート状の断面を持ち、この下部は南北側が外傾しつつ、東西側はほぼ垂直に掘り込まれている。深さは約220cmである。底面は周辺から中央に向かって緩く窪んでいた。遺構に伴う遺物は出土していない。

SE-4（第20図、図版7）

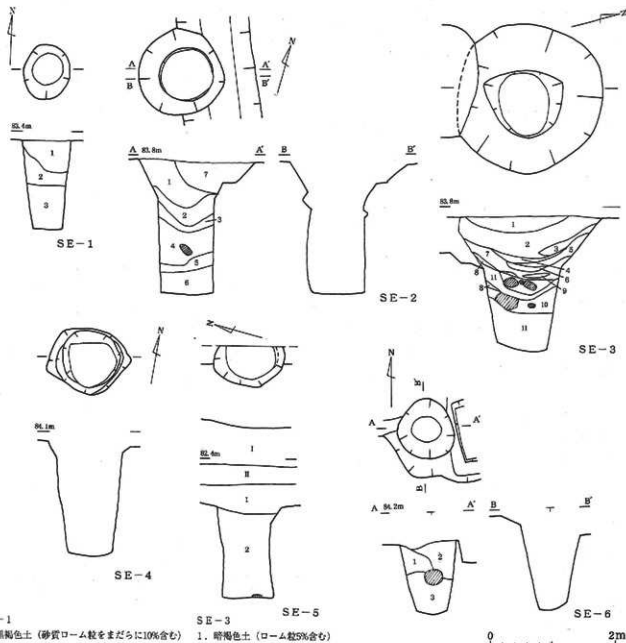
調査区東側のD-4区に位置する。SI-5と重複し、これを切って掘り込まれていた。平面形は東西135cm、南北105cmの北側を底辺とする不整の五角形状である。壁は外傾して1から2段の稜が付き、深さ約180cmである。底面は周辺から中央に向かって緩く窪んでいた。遺構に伴う遺物は出土していない。

SE-5（第20図、図版8）

調査区南東側のE・F-2区に位置する。SD-6と重複し、これに切られている。東側は調査区域外に延びる。平面形は楕円形と思われ、南北114cm、東西は現況で66cmを測る。壁は外傾しており、深さ約150cmである。底面は平坦である。遺構に伴う遺物は出土していない。

SE-6 (第20図、図版8)

調査区西側のC-5区に位置する。SI-3の張り出しピットの一部分と重複し、これを切っていた。南側で後が付き、張り出しピット底面付近での平面形は東西187cm、南北194cmの楕円形である。しかしローム上面からの壁は外傾しており、本来はロート状の断面を示すものと考えられる。深さは遺構確認面から測り154cmである。底面は周辺から中央に向かって緩く窪んでいた。遺構に伴う遺物は出土していない。



SE-1

1. 黒褐色土 (砂質ローム粒をまだらに10%含む)
2. 黒褐色土 (砂質ローム粒25%、塊10%含む)
3. 黒褐色土 (砂質ローム粒10%含む)

SE-2

1. 暗茶褐色土 (ほぼ単層)
2. 黒褐色土 (塊状にローム粒30%含む)
3. 暗茶褐色土 (ローム粒70%含む)
4. 黒褐色土 (塊状にローム粒40%含む)
5. 暗茶褐色土 (ブロック状のロームが主体)
6. 黒褐色土 (粘性あり、ローム粒5%含む)
7. 黒褐色土 (黒色土塊8%含む)

SE-3

1. 暗褐色土 (ローム粒5%含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒5%、暗褐色土塊15%含む)
3. 黒褐色土 (ローム粒・塊20%含む)
4. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)
5. 黄褐色土 (ローム粒・塊、黒褐色土20%含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒・塊20%含む)
7. 黒褐色土 (ローム粒10%、暗褐色土塊15%含む)
8. 黒褐色土 (ローム粒30%含む)
9. 黒褐色土 (ローム粒40%含む)
10. 黄褐色土 (ローム粒・塊40%含む)
11. 黒褐色土 (ローム粒・塊15%含む)

SE-5

SE-5

- I. 盛り層
- II. 盛り土
1. 暗茶褐色土 (ローム粒5%、SD-6層土)
2. 黒褐色土 (ほぼ単層、粘性が強い)

SE-6

1. 黒褐色土 (ローム粒15%含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒40%含む)
3. 暗褐色土 (ほぼ単層)

3. 溝跡 (第21・22図、図版8)

中世以降の溝跡は、SD-2~9の計8条を確認した。溝跡は、北から延びて東に折れ、D・E-2区付近で立ち消えるSD-2、ほぼ南北方向へ弧状に延びるSD-3~6、東西方向に延びるSD-7・8、東から北西方向に延びるSD-9を調査した。SD-3~5は、当初1条の溝跡として南西端から掘り進めたが、北東側及び中央付近において2条の溝の重複を確認し名称したが、溝の両端では1条の一連のものであり、重複部分での新旧関係は明確ではなかった。SD-6は底面が2段に認められた。遺物は縄文時代から古墳時代に至る土器小片が稀に入り込んでいたが、SD-3とSD-6からは近世~大正の時期の陶磁器片が出土している。

4. 性格不明遺構

今回の調査の中で、土坑より大型で、浅いながらも堅穴状の掘り込みを示すものがあり、遺構番号はSXとしたが、方形堅穴跡とは異質であることから、本報告では、性格不明遺構として取り扱うこととして別に記載した。

SX-1 (第23図)

調査区南側のD-2区に位置する。SK-3と重複し、これに切られている。平面形は東西275cm、南北213cmの楕円形状を示し、壁は緩く外傾しつつ立ち上がっている。深さ約18cmである。底面は堅穴の周辺から中心部に向かって緩く傾斜していた。遺物は出土していない。

SX-2 (第23図、図版8)

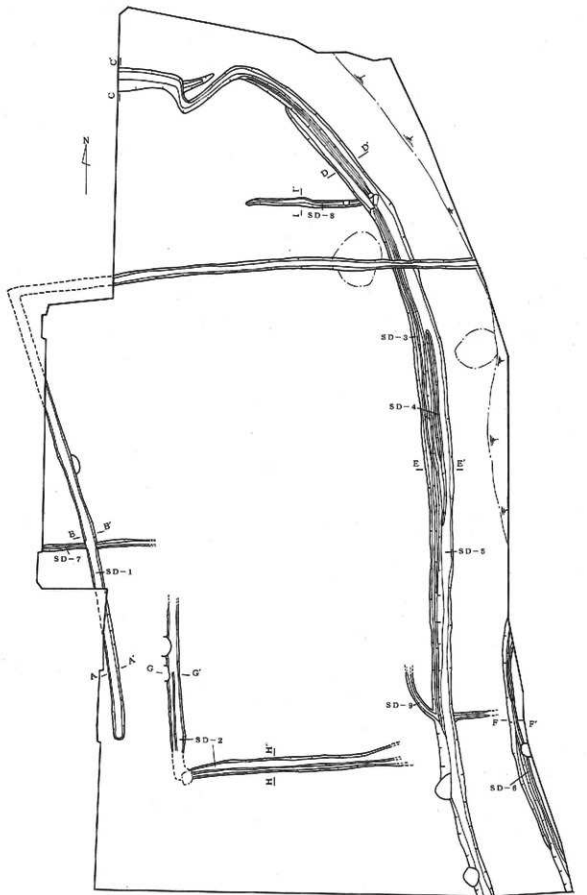
調査区中央部やや東側のD-4区に位置する。平面形は東西513cm、南北325cmの隅丸長方形の形状を示し、北壁中央部に張り出しが認められた。壁は緩く外傾しつつ立ち上がっている。深さは中央やや東側が最深部で、25cm程である。底面は若干の起伏を持ち、周辺から最深部に向かって緩く傾斜していた。尚、壁際や床面で8口の小さな小穴が認められたが、本跡に伴うものではない。遺物は出土していない。

5. 土坑 (第24図、図版8)

土坑は22口が認められた。平面形は長方形状か円形、楕円形で、深さはいずれも浅い。また、小穴が底面及び壁際に認められるものもあるが、土坑に伴うものではない。遺物は出土していない。規模・形状については表記した。

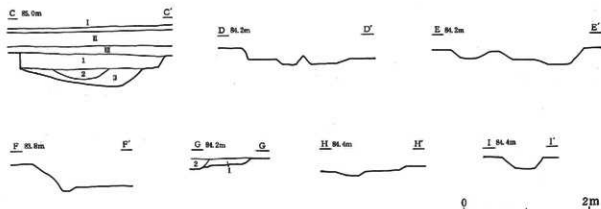
第2表 調査区内土坑計測表

遺構 (No.)	大きさ	深さ	平面形	遺構 (No.)	大きさ	深さ	平面形
SK-2	長軸150、短軸94cm	13cm	長方形	SK-13	90×94cm	13cm	円形
SK-3	94×55cm以上	20cm	円形	SK-14	82×91cm	9cm	円形
SK-4	長軸122、短軸84cm	18cm	楕円形	SK-15	94×100cm	9cm	円形
SK-5	長軸213、短軸83cm	11cm	長方形	SK-16	99×104cm	14cm	円形
SK-6	108×118cm	21cm	円形	SK-17	長軸145、短軸78cm	9cm	長方形
SK-7	76×88cm	8cm	円形	SK-18	東西82、南北77cm	17cm	長方形
SK-8	長軸138、短軸63cm	12cm	長方形	SK-19	東西61、南北54cm	5cm	長方形
SK-9	長軸110、短軸66cm	12cm	長方形	SK-20	長軸146、短軸69cm	11cm	長方形
SK-10	92×92cm	12cm	円形	SK-23	116×120cm	16cm	円形
SK-11	長軸106、短軸50cm	14cm	長方形	SK-24	100×107cm	20cm	円形
SK-12	長軸163、短軸84cm	17cm	長方形	SK-25	長軸125×短軸66cm以上	14cm	長方形



第21図 SD-1~9

0 10m



SD-5

C-C'

I. アスファルト

II. 砕石

III. 盛地層

1. 試掘埋め戻し

2. 黒褐色土 (ローム粒・塊15%含む)

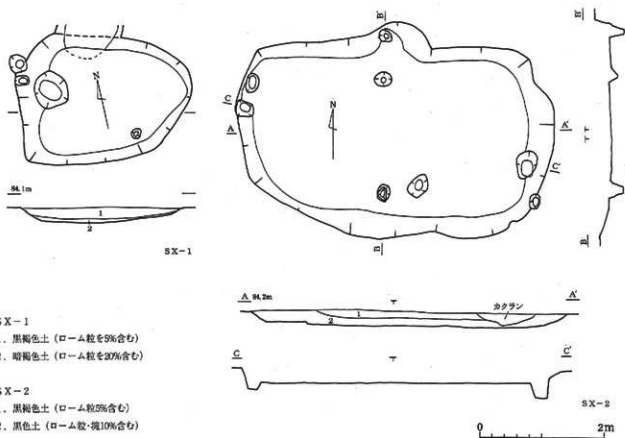
3. 黄褐色土 (暗褐色土塊25%含む)

G-G'

1. 黒褐色土 (ほぼ単層、ローム粒若干含む)

2. 暗茶褐色土 (所々にローム塊を含む)

第22図 SD-2-6・8断面図



SX-1

1. 黒褐色土 (ローム粒を5%含む)

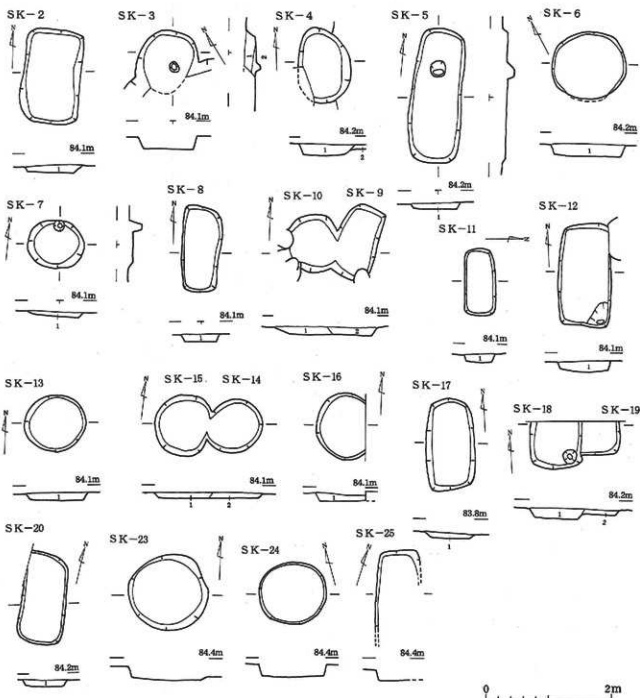
2. 暗褐色土 (ローム粒を30%含む)

SX-2

1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

2. 黒色土 (ローム粒・塊10%含む)

第23図 SX-1・2



SK-2
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-3
1. 暗茶褐色土 (ローム粒5%含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒5%含む寄りなし)

SK-4
1. 暗茶褐色土 (所々にロームを含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-5
1. 黒褐色土 (ローム粒10%含む)

SK-6
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-7
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-8
1. 暗茶褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-9・10
1. 黒褐色土 (ローム粒・塊10%含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-11
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-12
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-13
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-14・15
1. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)
2. 黒色土 (ほぼ単層)

SK-16
1. 黒褐色土 (ローム粒・塊10%含む)

SK-17
1. 暗茶褐色土 (ローム粒・塊30%含む)

SK-18・19
1. 黒褐色土 (ローム粒・塊5%含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒5%含む)

SK-20
1. 黒褐色土 (暗茶褐色土を所々に含む)

第24図 SK-2~20・23~25

調査区内出土遺物

縄文式土器 (第25図、図版12)

1~10は縄文時代早期前半の擦糸文系土器で内面はナデ仕上げである。1・2は色調は内外面淡褐色、胎土はやや砂質で白色微砂粒を含む。3は色調は外面淡褐色、内面黒褐色で煤が付着している。4・5・6は内外面淡褐色で、胎土は砂質で白色微砂粒を含む。7は内外面褐色、8は内面黒色、外面黒褐色で、胎土は砂質で白色砂粒を含む。9は外面褐色、内面黒褐色、10は内外面褐色で、擦糸を施文後、軽くナデしている。胎土は砂質で白色微砂粒を多量に含む。

11は早期前半の押型文系土器である。楕円が窪んでおり、ネガティブな楕円文と呼ばれている。内面ナデ仕上げ、色調は外面赤褐色、内面淡黒褐色、胎土は砂質で白色微砂粒を多く含む。近畿地方の大川式・神宮寺式土器である。

12・13は早期中葉の沈線文系土器である。12は内彎する口辺部片で、沈線により、上下の横方向の中に波状文を配し、下半には貝殻復縁文を施文している。13は横方向の沈線の下半に貝殻復縁文を施文している。色調は外面灰褐色、内面淡褐色で、胎土はやや砂質で白色微砂粒を含む。同一個体で内彎口辺から田戸上層式土器と思われる。

14~17はヘラケズリを施す一群で、貝殻を使用したものも含まれている。14は口辺部で口唇部が外傾している。外面は粗いヨコナデで下端に細い横沈線を施し、下半は交叉沈線と思われる。内面はナデである。色調は外面淡褐色、内面黒褐色で、胎土は砂質である。15・16は外面ヨコヘラケズリによって隆起線を表出している。内面は粗いナデで、色調は共に外面淡褐色、内面黒褐色、胎土は砂質で8~10mmの白色の小石を含んでいる。同一個体である。17は15・16に比べ薄手で、外面は棒状具でヨコ引きしている。内面は粗いナデ仕上げ。色調は内外面黒褐色、胎土は砂質で白色砂粒を含んでいる。早期後半の条痕文系土器の擦痕文と条痕文の子母口式・田戸下層式土器と思われる。

18~28は早期中葉の沈線文系土器である。18~22は細い沈線、23~28は太い沈線である。18は外面に右回りの沈線を3段引き、口縁は右回り、下2段は左回りの角押し文を施文している。内面は口唇から2cmはヨコナデし、下半は粗いヨコナデである。色調は内外面淡褐色、胎土は砂質で白色砂粒を多量に含んでいる。19は外面横と斜沈線、下半は縦の条痕、内面はナデ仕上げである。色調は内外面淡褐色、胎土はやや砂質で白色微砂粒を含む。20は外面斜方向の無紋帯と交叉集合沈線を交互に配し、内面は粗いナデである。色調は外面茶褐色、内面赤褐色、胎土はやや砂質で白色微砂粒を含む。21は外面に横沈線、下方は交叉沈線である。色調は外面褐色、内面黒褐色、胎土は20と同じ。22は外面に集合沈線を施文している。内面はナデ仕上げ、胎土はやや砂質で白色砂粒を含んでいる。23は口辺部片で口縁は丸い。横沈線に縦の沈線を配している。色調は外面赤褐色、内面淡褐色、胎土は良質土である。24~28は体部片で横沈線と斜沈線を配し、内面は粗いナデである。胎土は24が良質土、他は砂質土で白色微砂粒を含む。18~22は三戸式土器、23~28は田戸下層式土器と思われる。29は底部で外面ヨコヘラケズリ、内面ナデである。

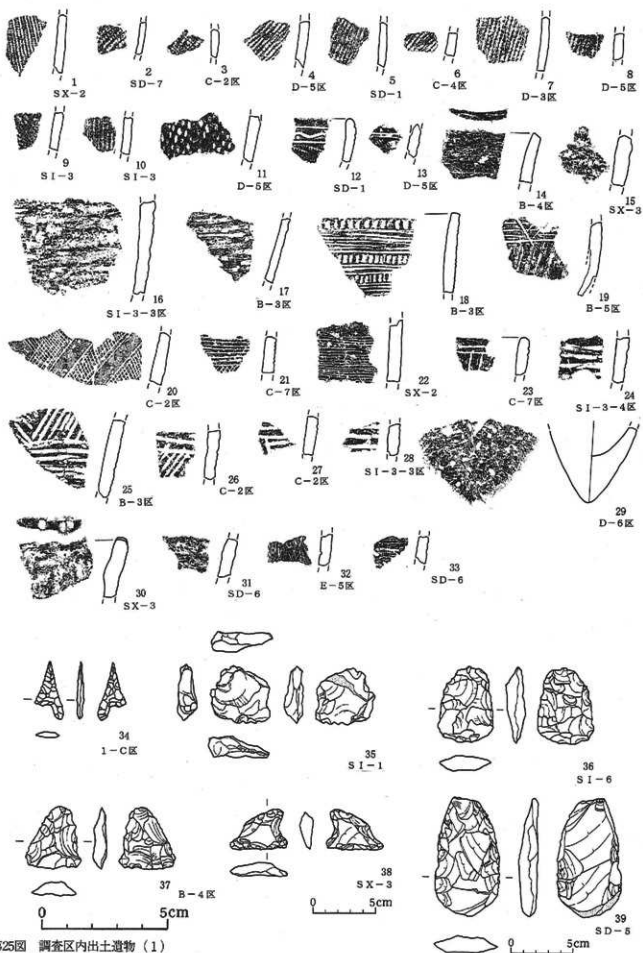
30~33は胎土に繊維を含む一群である。30・31は内外面ユビナデで30の口唇部には棒状具による押圧がある。色調は30が外面赤褐色、内面淡褐色、31が外面淡褐色、内面灰褐色である。32・33は外面ヘラケズリ、内面ユビナデである。色調は32が外面灰褐色、内面淡褐色、33が外面淡褐色、内面黒褐色である。早期後半の野鳥式の可能性がある。

縄文時代早期前葉の擦糸文系土器、中葉の沈線文系土器・押型文系土器、後葉の条痕文系土器で早期に限定され継続性を認めらるであろう。また、楕円押型文系土器は近畿地方のもので、交流を考える上で大変貴重である。

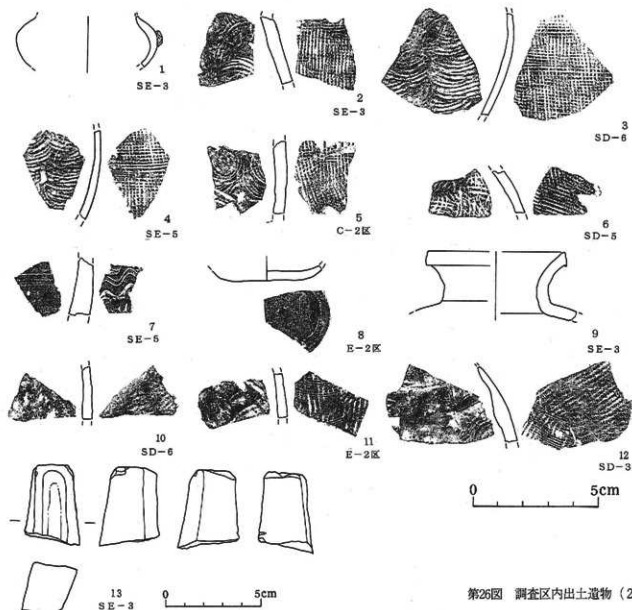
石器 (第25図、図版13)

34は石鎌の凹基無茎鎌で片方の逆刺が折損し、調整剥離は微細である。長さ2.3cm、推定幅1.4cm、厚さ6mm。35は搔器の調整剥片で、下端に調整剥離が認められる。縦2.92cm、横2.22cm、厚さ7.55mm。37は搔器で左側端に使用痕がある。縦2.47cm、横2.19cm、厚さ4.4mm。38は搔器で上下端に調整剥離があり、上端には使用痕がある。縦3.16cm、横5.03cm、厚さ10.7cm。39は打製石斧で使用痕は明瞭ではない。縦9.29cm、横5.19cm、厚さ14.8mm。

出土土器から縄文時代早期の一群であろう。石質は34・36・37がチャート、35は碧玉、38・39は珪質頁岩である。



第25图 調査区内出土物(1)



第26図 調査区内出土遺物(2)

須恵器(第26図、図版13)

1は、甕の肩部片から胴部上半で文様は無く、窯材が溶着し自然釉が付着している。色調は外面が黄緑色、内面が灰白色、胎土は良質土で白色微砂粒を含む。2～6は甕の体部片で、2～5は外面板目叩きの後撻状工具で横引きしている。内面には同心円の当具痕がある。色調は内外面灰白色で、胎土は良質土で、白色微砂粒を含み、断面は赤褐色に焼けている。同一個体である。6は外面板目叩きの後ヨコナデ、内面には同心円の当具痕がある。色調は外面灰色、内面灰褐色で胎土は2～5と同じである。7は甕の口辺部片で、外面は撻描波状文、内面はヨコナデである。色調は内外面黒褐色、胎土はやや砂質土で石英の微砂粒を含む。8は坏の底部片でヘラ切り後回転ヘラケズリである。底面には手板痕がある。色調は内外面青灰色、胎土は良質土で白色微砂粒を多量に含む。9は小型甕の口辺から肩部片である。成形は粘土紐でロクロ整形、頸部内面には絞り痕が見られ、肩部内面はヘラを当て整形している。色調は外面灰白色、内面は自然釉が付着し黒灰色、胎土は良質粘土で白色・黒色微砂粒を僅かに含む。10～12は甕の体部片で粘土紐成形後ロクロ整形である。外面は板目叩きの後ヘラナデあるいはヨコナデ、内面は当具の後ヨコナデである。色調は外面自然釉が付着し灰緑色、内面は灰白色で胎土は9と同じである。生産地は1が猿投窯、2～6・8は在地産三龜窯か、7は新治産か、9～12は東海産湖西窯であろう。時期は1が6世紀前半、2～6が6世紀代、7・9～12は7世紀後半～8世紀初頭、8は9世紀代であろう。13は砥石で4面に使用痕があり、1面が窪んでいる。

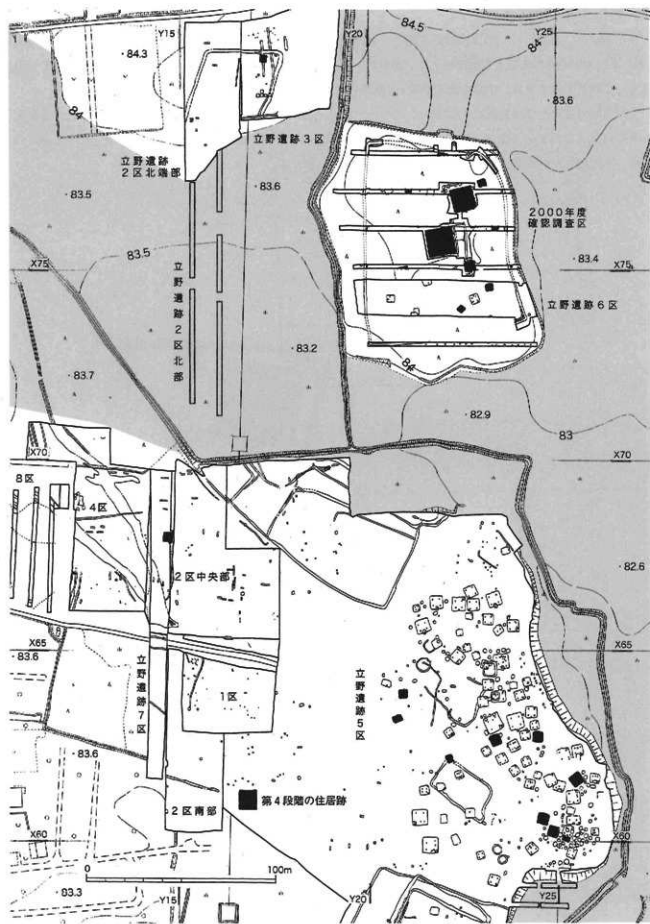
Ⅲ むすび

1. 今次調査の成果

立野遺跡は、これまでに（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによって確認調査と1～8区に及ぶ本調査が行われている（第27図）。今回の調査では、2000年度に行われた確認調査で既に認知されている、2軒の大型住居を含む5軒の住居跡を調査し、古墳時代中期～後期後半に至る集落跡を確認すると共に、中世～近世に至ると考えられる遺構も数多く調査した。

確認した遺構は、古墳時代と判断されたものが、先述の住居跡5軒及び土坑3口、溝跡1条である。これらの中で特記すべきは2軒の大型住居跡の存在であり、特にS I-2は、以前の確認調査によって、古墳時代としては栃木県内で最大規模の住居跡であることが報告されていた。しかしながら今回の調査においては、住居跡の大半が調査区域外に位置していたため、その南東隅と北東隅の一部分、住居平面積の5%程を調査出来たに留まった。だが東壁側の南（B区）と北（A区）の両端部が調査出来た事によって、一辺15mの規模を実測出来、またA・B両区において4層の床面が確認された事によって造り替えが行われていることも把握出来た。さらには、両区共に、床面直上の埋積土中には、多量の焼土及び炭化物の混入する層が認められ、焼失家屋と判断された。尚、2000年度の確認調査の際にサブトレンチの掘り下げによって、多数の石製模造品や白土の出土が報告されている事から、今回の調査においても掘り上げた埋積土の簡いかけを行ったものの、北東側（A区）の埋積土より石製模造品の欠損した剥片が4点出土したに留まった。もう1軒の大型住居であるS I-3は、S I-2の北東側に位置しており、一辺が約12m規模の住居跡である。S I-2よりも、やや規模は小さくなるものの、今回の調査において住居全体を調査し得た。現在のところ完掘された古墳時代の住居跡としては、県内最大の住居跡となる。本跡も主に住居の中央から北壁に至る床一面に、多量の炭化物、焼土などの堆積が認められ、焼失家屋と考えられた。また住居の南壁中央部には張り出しピット、東壁側の中央やや南寄りには、凝灰岩の切石を構築材として使用したカマドを施設している。このカマドには、造り替えの痕跡が認められ、袖や天井部だけでなく、カマドの底部分にも「コ」の字状に加工した石材を使用していた。これら2軒の住居跡は、7m程の間隔で隣接しており、その間を2軒の住居跡と並行する形でS D-1が北へ延びていた（第28図）。この溝はS I-2南東隅から東側へ1m程の所を始点として、S I-2東壁とS I-3の西壁の間を通り抜けるように延び、S I-3の北西域でほぼ直角に右に折れ曲がり、今度はS I-3の北壁と並行する形で東へ延びている。この事からS D-1は、これらの住居跡を区画する溝と推察され、大型住居跡の性格や規格に関して何らかの規則性を示しているものと考えられた。また今回の調査によって、これらの構造や配置などが確認出来たことは、古墳時代の集落のあり方を考える上での良好な資料を得られたものと思われる。

次に、中世もしくはそれ以降の時代と考えられる遺構としては、方形竪穴3基、井戸跡6基、溝跡8条、土坑22口、性格不明遺構2基等を確認し調査した。これらの中で中世の遺構と考えられるものは、方形竪穴（S X-3～5）や井戸跡（S E-1～6）である。しかしながら、S X-3の底面直上からは渡来銭が4枚出土し、六道銭と考えられたが、その他の遺構については、井戸跡の埋積土中より古墳時代の須恵器片が数点出土しているものの、遺構に伴う物とは考えられず、遺物によって時期を明確にすることは出来なかった。また溝跡は、S D-2～9の8条を確認し調査したが、埋積土中より縄文土器片・石器、土師器片、須恵器片などと共に、近世の磁器片及び近代の陶器片やタイル片なども出土している。さらに土坑（S K-2～20・23～25）は、底面が平坦な長方形、或いは円形もしくは楕円形の平面形を持つものを22口確認し調査した。その形状から、この他に確認した掘乱と判断される多数の穴跡や風倒木痕跡などとは明確に区別できるが、遺物の出土も無く、形状や埋積土の状況から推考すると、近世以降における農作物の貯蔵用施設と判断され、先述の溝跡と共にさらに時代が下るものと考えられる。

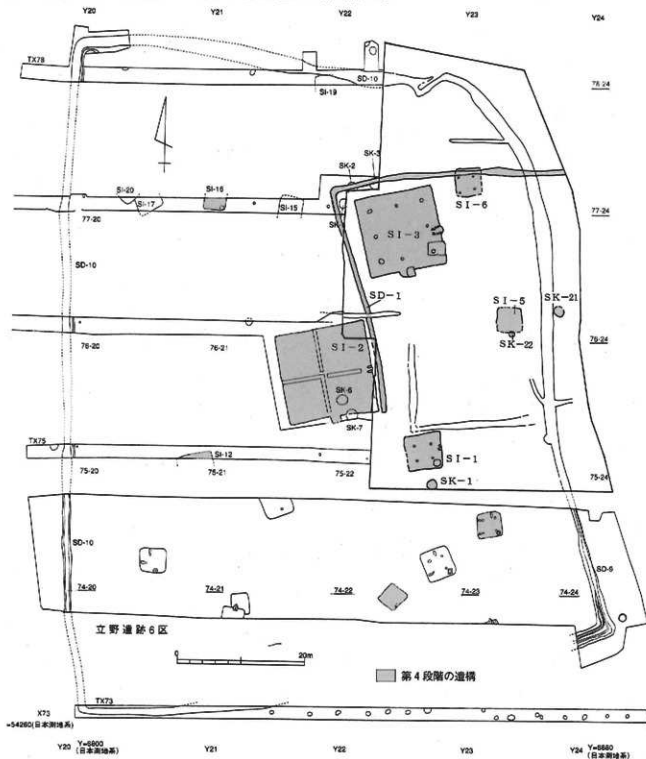


第27図 立野遺跡、第4段階の住居分布図

2. 調査成果の留意点

今次調査区（A区）は、第27図に見る如く、立野遺跡全体の北東端に位置し、四囲を低湿地に囲まれた南北約120、東西80mの島状を呈する微高地上に立地する。この地区は平成12年に試掘調査が実施され、南寄りの一部は6区として調査済みである。今回は未調査部分の東半分が対象であった。

立野遺跡の推定面積は約123,000㎡で、このうち約2%にあたる約2,360㎡を調査したに過ぎない。また、県埋文センターによるこれまでの調査（1～8区、2000年度確認調査）によって100件以上、古墳時代に限定しても88軒の住居跡（竪穴建物）が調査されているが、今回は僅かに5軒に留まる。



第28図 立野遺跡2000年度試掘、6区、今次調査区における第4段階の遺構分布図

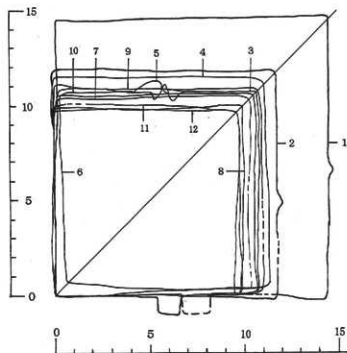
既にそれらの成果が公刊されており(註1)、これらと今次調査の成果との対比により今次調査区の特徴を略記する。前記の調査報告書によれば、大規模な集落跡が調査された5区及び6区周辺の資料を基に古墳時代を第1段階(古墳前期末～中期初頭、4世紀末)～第9段階(古墳終末期後半、7世紀後葉)に区分(1段階のみを新たに区分する)しており、今次調査分は概ね第4段階に属する。尚、これまでの調査で時期の判明する約90軒の住居跡のうち、約23%にあたる21軒が第4段階に属し最も多い。この時期の住居跡は南の5区で9軒、6区周辺(今回分を含む)で9軒、北東の3区、西方の7区が各1軒である。また、5区の9軒は広い範囲に2～3軒が散在する分布状況を示すが、6区周辺では、中央の2軒の大型住居を中心に、その周囲に小規模な住居が点在する感を呈する。これは地形的な制約によるものか、意図的なものかは明確にし難いが、中央に位置する住居が県下最大級の規模であることを考慮すれば、意図的な配置と見るのが妥当と思われる。さらには、周囲を低湿地に囲まれた島状を呈する微高地上の占地についても、周囲に堀や溝を廻らす所謂「豪族居館」との関連から推して、意図的なものを感じる。

今回の調査成果の中で、(a) S I - 2・3の規模、(b) 石造りのカマドが目ざされ、細部では(c) 所謂張り出しピット、(d) 間仕切り溝、(e) 上屋根築材、(f) 出土遺物の種類・多寡などが挙げられる。

(a) 住居の規模については、第29図(1)のS I - 2(2000年度試掘・今次調査)は南北15、東西約14.5m。(2)のS I - 3は南北12.0、東西11.9mで、本遺跡(立野全体)内においては群を抜き、比較に値する資料は見られない。他方、県下の調査事例を見ても、古墳時代では以下の如く一辺9.7～11mのものは認められるが、12m以上の例は管見では確認出来なかった。

小山市御料遺跡のS I - 28(3)は南北11、東西10.7m、主柱は4本で2ヵ所に炉跡が見られた。建替前(床面下)には南と北に各々3条の間仕切り溝が設けられていた。火災の痕跡が見られ、多数の土師器の他、石製模造品・白玉などが31点出土し、古墳中期前葉と考えられている。

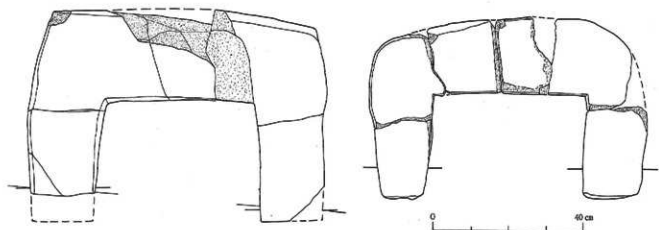
二宮町蟹が入遺跡は、古墳時代中期の住居跡が5軒調査され、H T - 29号(4)は南北11.4、東西11.2m、主柱は4本で中央や北西に設けられる。遺物は、土師器が主体で、火災の痕跡は認められなかった。古墳中期後半代と推定される。



第29図 栃木県下の大型住居の規模比較



第30図 松野遺跡KT-3カマド(上・下)



第31図 凝灰岩製焚口部の比較（左：立野遺跡A地区 SI-3 右：殿山遺跡 KT-216）

芳賀町の免の内台遺跡は、古墳時代後期前葉であるが、確認調査（昭和57年）1号住居跡（5）が南北10.67、東西10.4m、SI-304（6）が南北10.7、東西10.1m。共に北壁にカマドが築かれ、主柱は4本で、火災の痕跡が認められた。1号は南に張り出しビットが見られ、SI-304は東西側を中心に13条の間仕切り溝が設けられていた。遺物は、共に土師器が主体で、SI-304より須恵器甕が出土した他は目立つものは無い。

高根沢町砂部遺跡では、古墳時代中期の住居跡が54軒調査されている。この中に一辺9.7～11mの大型のものが6軒（7～12）見られ、そのうちSI-244（9）が11×10.9mと最大である。いずれも主柱は4本で炉跡は認められず、火災の痕跡も見られなかった。遺物は土師器を主体とするものの、SI-230、244、422、434から須恵器、SI-230、244、422からは石製模造品が出土している。

以上の如く、管見によれば、古墳時代の住居跡としては、本遺跡のSI-2が県内最大規模で、それに次ぐのがSI-3と判断される。

（b）石材を多用したカマドについても県下においては顕例に乏しい。本県は県内各地に凝灰岩もしくはこれに類する軟質の石材産地が存在することから、住居跡のカマドに軟質の石材が利用される例が多く認められる。これは、本県内に留まらず、埼玉県東松山市周辺では凝灰岩、東京都南西部～神奈川県東部では泥岩の切石の使用が見られる。しかし、これらの大部分は、焚口の門柱及び底部分に限られ、それぞれ柱状にしたものを組み合わせて使用するか、門柱のみ、底部分のみの場合もある。本遺跡のSI-3の如く、焚口はコの字形に切り抜き、側壁から天井部分まで切石を利用する例は皆無に等しい。管見にふれた例で、コの字形の焚口部材は、南に隣接する上三川町の殿山遺跡のKT-216より出土している（第31図）。この住居跡は、南北約6、東西6.4m以上のやや東西に長い方形と推定され、北壁にカマドが築かれていた。あいにく遺物の出土が無く、時期は特定できないが、カマドの火床が壁より約40cm内側にあり、煙道が壁をあまり切り込んでいないことから、古墳時代後期でも初期の段階と推察される。6片に割れた石材を接合したところ、第31図に示すように、幅74、高さ49、厚さ11.5cm、焚口部の切り込みは、幅約40、高さ27cmであった。また、脚部の火熱を受けた痕跡から脚部下端の9cm程は、土中に埋め込まれていたと推察される。残念ながらカマドの遺存状態が悪く、他の部分については不明であるが、石材が遺存しないことから粘土で築かれていたと考えられる。SI-3の石材は、幅70、高さ50、厚さ20cmとやや厚みがあるが、焚口部の切り込みも幅40、高さ30cmとほぼ同規模である。しかし、脚部下端の埋め込みが比較的浅く、天井が高かったと推察される。

次に天井部まで石材を利用した例は県北東部、那珂川町（旧馬頭町）の松野遺跡に見られた。古墳時代後期の住居跡7軒のうち後期前葉と思われる4軒に凝灰岩が多用されていた（第30図）。このうち2軒は火災の痕跡が認められた。いずれも天井部は落下していたが、側壁（袖部）の状況からカマド内の高さは17～20cm程と推定される。

遺跡の北方約4kmの那珂川左岸には凝灰岩の露頭や国指定史跡菅御所横穴墓などが所在する。さらに那珂川を隔てた西方約3kmの那須烏山市(旧烏山町)中山にも凝灰岩の露頭が見られ、白坂の横穴墓が所在し、近代にはカマド用石材として切り出されていた。松野遺跡の石材は、そのいずれとも決し難いが、近隣に石材が豊富に所在し、横穴墓等の石材の加工技術を持った人々が存在したものと推察される。

尚、本遺跡の石材についても専門家による同定は行っていないが、体験的には市内長岡町付近と推定され、ここにも県指定史跡の長岡百穴横穴墓群が所在し、中世(一部は古墳時代)以降近代まで石材が採掘された所である。S I - 2は、試掘調査時の所見ではS I - 3と同様に凝灰岩で造られていることが確認されている。また、S I - 1、S I - 5も東壁側にカマドが設けられていたことは推測し得たが、遺存状態が悪く詳細は明確にできなかった。尚、S I - 1には凝灰岩の切石が遺存したことから、焚口部に使用されていたと推察される。S I - 3は当初天井部に使用していた薄い切石をカマド底面に敷いて改造したと考えられる。これらの石材から推定復元したのが第11図右下であるが、この状態ではカマドに煮炊き用の甕をかける穴が存在しない。改造のために別の用材を用いたのか、当初より煮炊きを考慮(甕類の出土が無い)しなかったのか疑問を残すところである。

(c) 所謂、張り出しピットはS I - 2・3の大型住居に認められた(S I - 2は2000年度試掘調査時に確認)。立野遺跡のこれまでの調査で8軒、今回の調査を含めて計10軒に設けられていた。時期別に見ると、第2段階2軒、第3段階1軒、第4段階2軒、第5段階3軒、第6段階2軒と古墳時代前半～中葉にかけてほぼ均等に認められる。また、住居の規模は、7m代3軒、8m代4軒、9m、12m、15m代各1軒で、すべて7m以上の大型の住居に施設されていた。また、A区S I - 3は、張り出しピットの周囲に断面が箱掘り状の非常に確した周溝が設けられており、角があまり型崩れしていないことから蓋が被せられていた可能性が高い。

(d) 所謂、間仕切り溝を持つ住居は、これまでの調査と今回分(S I - 2)を含め計16軒に認められた。時期的な内訳は、第2段階5軒、第3段階1軒、第4段階3軒、第5段階6軒、第6段階1軒と差があり、第2段階と第6段階に増加が認められる。また、住居の規模を見ると、4m代2軒、5m代5軒、6m代1軒、7m代4軒、8m代3軒、15m代1軒で、5m代以上に多く見られるが、大型の住居であっても、A区S I - 3の如く全く認められないものもあり、住居の性格を考える上で興味深い。

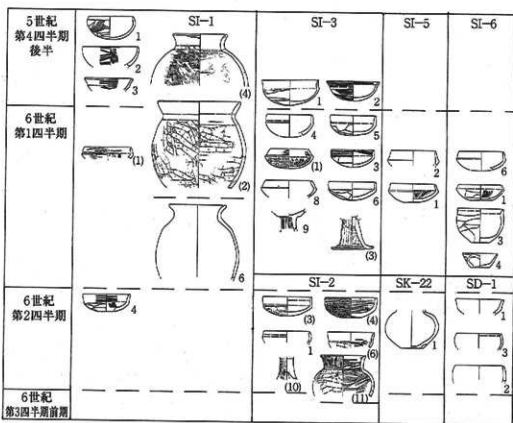
(e) 上屋構築材について、S I - 2は炭化材、S I - 3は柱根2点と炭化材を同定した。S I - 2の上屋材には「きはだ材」と「クヌギ材」が見られた。S I - 3の柱材は「ひのき材」であり、竪穴式住居の用材としては稀な事例と思われる。しかし、一辺12mの竪穴式住居ともなれば、上屋の高さは相当なものになり、一般的な広葉樹での建築が不可能であったのか、この住居の性格上あえて使用したものかは判然としない。また、炭化物としては「クリ材」が多く見られ、屋根を葺いていたと思われる「イネ科」の植物も確認された。

(f) 出土遺物に関して今次調査では5軒の住居跡を調査した(S I - 2は一部分)が、土師器類が少量と、S I - 2より滑石製模造品4点(完形1点)、S I - 3より滑石製白玉2点、S I - 5より滑石製紡錘車が1点出土したに過ぎない。S I - 2は、試掘調査時に石製模造品が多数出土したことから今回の調査でも期待されたが、調査区の関係で東寄りの二隅を調査出来たに過ぎず、上記の結果に留まった。逆に全体を調査出来たS I - 3は少量の土師器と白玉が2点と住居の規模に反して遺物が非常に少ない。S I - 2同様火災に遭った痕跡が認められるものの、床面の造り替えも無く、間仕切り溝も認められない。カマドの問題や、火災の痕跡もS I - 2に比較してやや弱く見受けられたことも含め、使用期間の長短や利用の用途に違いがあったものと推察される。

3. 立野遺跡の性格

第32図は住居・土坑・溝出土の土器の特徴によって図示した。調査ではS I - 6をSD - 1が切り、S I - 5と

SK-22は不明であった。この地区ではSI-1が最初に構築され、続いてSI-3が、さらにSI-5・6が同時に構築された。この4軒の住居で最大の特徴はSI-1には什器と煮水具が認められるが、SI-3・5・6は煮水具がない。また東西12mのSI-3は人為的に焼却処分され、新たに15mのSI-2が構築された。と同時にSI-5・6も廃棄された。SD-1はSI-6を切っていることからSI-3の区画溝ではなく、SI-2の結界的なものとも思われるが、住居との位置関係から疑問をのこす。SI-1は野として継続していた。土器はSI-3(1)が漆仕上げ、SD-2(2)が外面漆仕上げ、内面素焼きの他は赤色土器で鉄泥漿土器・鉄含侵土器から鉄化粧土器に徐々に変わるようである(註2)。また器内面の荒れと身と蓋の出土組成から須恵器坏模倣は身に蓋模倣は蓋に使用されていた可能性がある。このように3号から2号へ継続する大型住居は特殊な性格と考えられる。SI-3に煮水具及びカマド石材に懸掛の穴が見られないことから本来の用途ではなく暖房を目的とした可能性も考えられ、朝鮮半島の渡来系の影響とも見られさらに特殊性を増すが今後の課題とする。



第32図 住居出土土器の編年観 (縮尺1/10)

註1 内山敏行 2005 『東谷・中島地区道跡群5 立野道跡(1~8区)』 栃木県教育委員会・(財)ちぎ生誕学習文化財団

註2 大川 浩 1996 『赤彩土器』分類と名称『日本土器事典』 大川 浩、鈴木公雄、工妻通爾 雄山閣

参考文献

- 石川 均ほか 1980 『芳賀西部台地土地区画整理事業 道跡確認調査概報』 芳賀町
 竹沢 謙ほか 1990 『砂部道跡』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 水野順敏ほか 1990 『甕が入道跡』 日本窯業史研究所
 大賀 健ほか 1992 『免の内台道跡』 芳賀町教育委員会
 橋本望月 1994 『周仕切住居に関する覚書』 『研究紀要』第12号 栃木県立博物館
 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』 兵庫県埋蔵文化調査会
 片根義幸 1998 『御料道跡』『関ヶ原地区道跡群Ⅱ』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 内山敏行 2005 『東谷・中島地区道跡群5 立野道跡(1~8区)』 栃木県教育委員会・(財)ちぎ生誕学習文化財団

IV 自然科学分析

立野遺跡から出土した住居構築材の樹種

<目次>

はじめに	p. 40
1. 試料	p. 40
2. 分析方法	p. 40
3. 結果	p. 40
4. 考察	p. 41
引用文献	p. 42

<表・図版一覧>

表1. 樹種同定結果

図版1 木材

図版2 炭化材

立野遺跡から出土した住居構築材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

立野遺跡は、田川左岸の立川面に相当する田原台地上に位置する。本遺跡では、発掘調査により古墳時代後期の竪穴住居跡や土坑等の遺構が検出されている。このうち、覆土中にH r - F Aが認められるSI-3は、一辺約12mの大型の住居跡であり、住居北側を中心に構築材と考えられる炭化材が出土している。また、柱穴のうち北側の2箇所からは柱材が出土している。調査区の西側で一部が検出されたSI-2も検出状況から一辺約15mの大型の竪穴住居跡と考えられており、住居北東隅と南東隅から構築材と考えられる炭化材が出土している。本報告では、住居構築材の木材利用に関する資料を得るため、柱材および炭化材を対象として樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、SI-3の柱穴から出土した柱材2点、床面上から出土した炭化材4点、SI-2から出土した炭化材2点の合計8点である。この中から、SI-3の柱材2点 (P1P4)、炭化材2点 (サンプル1,2)、SI-2の炭化材2点 (サンプル1,2) の合計6点を選択する。

2. 分析方法

柱材2点は、加工痕がなく保存状態が比較的良好な部位から1cm角程度の木片を採取した。木片は、剃刀の刃を用いて木口 (横断面) ・柀目 (放射断面) ・板目 (接線断面) の3断面の徒手切片を製作し、ガム・クロラール (抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、種類を同定する。

炭化材は、3断面の割断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。柱穴から出土した柱材は、2点とも針葉樹で、ヒノキとヒノキ科に同定された。一方、炭化材は、全て落葉広葉樹で、3種類 (コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ・キハダ) に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ (Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

表1. 樹種同定結果

遺構	位置	番号	樹種
SI-3	P1		ヒノキ科
		P4	ヒノキ
	サンプル1		クリ
		サンプル2	
SI-2	サンプル1		キハダ
	サンプル2		コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-15細胞高。

仮道管の配列の特徴は上記のヒノキやアスナロに似ているが、アスナロの特徴の一つである放射柔細胞内の樹脂は認められない。これらの点を考慮すると、ヒノキの可能性はある。しかし、保存状態が悪いために分野壁孔が観察できない等、特徴の観察が不十分であり、ヒノキ科とした。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (Quercus subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・キハダ (Phellodendron amurense Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は4-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

4. 考察

SI-3は、一辺約12mのほぼ正方形を呈する大型の堅穴住居跡であり、同時期としては県内第二位の大きさを有するとされる。合計8本の柱穴が認められ、北側のP1とP4から柱材が出土した。柱材はいずれも芯持ちの丸木材で、残存直径は、P1が $\phi 60 \times 11.5$ cm、P4が $\phi 90 \times 15.0$ cmであった。一方、炭化材は、主に壁際付近の床面上を中心に出土しており、壁に直交するように出土しているものが多いことから、垂木等が火災で崩落した際に壁と床の隙間で蒸し焼きになり、炭化・残存したことが推定される。いずれも保存状態は悪く、使用時の形状や大きさ(径)については不明である。住居北壁中央付近の床面から出土した2点について樹種同定を実施した。

P1とP4から出土した柱材は、いずれもヒノキ科の針葉樹で、1点はヒノキであることが確認された。ヒノキに代表されるヒノキ科の木材は、一般に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で水湿に強い材質を有する種類が多い。柱穴内に埋められて立てられた柱であり、床下の土壌内の水湿に耐える木材としてヒノキ科(ヒノキ)を選択したことが推定される。一方、床面上から出土した垂木等と考えられる炭化材はいずれもクリであり、柱材とは木材利用が異なる。クリは、重硬で強度および耐朽性に優れた材質を有する。

一方、SI-2は、その多くが調査区外のために未調査であるが、検出された部分から一辺約15mの堅穴住居跡と考えられている。これは、同時期の検出例としては県内最大の大きさを有しているとされる。炭化材は、住居北東部の壁付近の床面上から出土した2点で、1点(サンプル1)は壁に対して直交する方向で出土し、1点(サンプル2)は壁に対して水平方向で出土している。サンプル1がキハダ、サンプル2がクスギ節であり、SI-3で出土したクリは認められなかった。クスギ節は重硬で強度の高い材質を有するが、キハダは比較的軽軟で強度は低い。

今回の分析結果により、柱材には水湿に強い木材、垂木等の構築材には強度の高い木材をそれぞれ使用したことが推定される。ただし、垂木等の構築材の樹種はSI-2とSI-3で異なり、SI-2では強度の低いキハダも認められた。これが住居の部材による木材利用の違いを反映したものかは不明である。

確認された樹種のうち、クスギ節は日本にクスギとアベマキの2種があるが、アベマキは関東地方に分布していないことから、クスギの可能性が高い。クスギは、関東地方の二次林（雑木林）の主構成種であり、比較的湿った土地を好む傾向がある。クリヤキハダも似たような環境に生育することから、田川周辺の低地等に生育していた樹木を構築材として使用した可能性がある。一方、ヒノキは尾根筋等に生育する種類であり、現在の栃木県内では西部の山地に分布するが、平野には分布していない。その他のヒノキ科では、栃木県内にサワラ、アスナロ、ヒノキアスナロ、クロベが分布しているが、いずれも西部の山地を中心に分布しており、平野部には分布していない。したがって、ヒノキとヒノキ科については、当時遺跡周辺には生育しておらず、西部の山地などから持ち込まれた可能性もある。

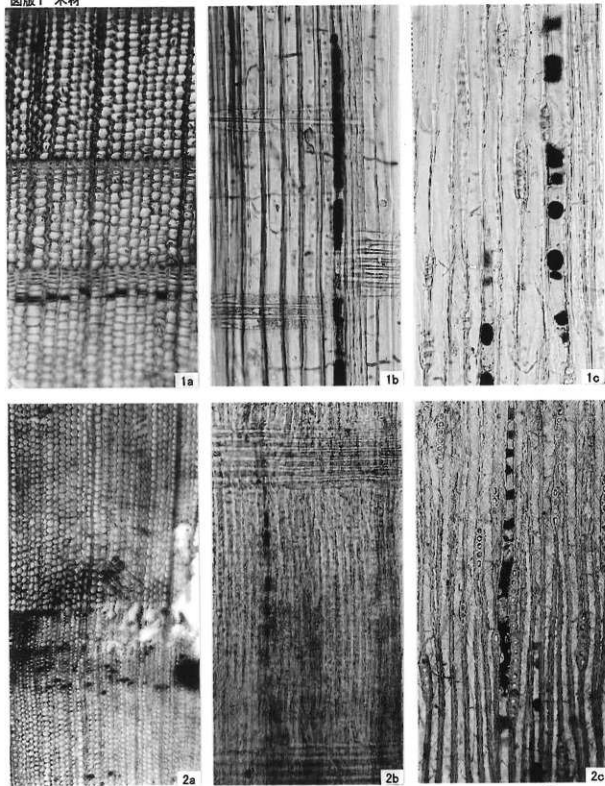
本遺跡周辺では、砂田A遺跡で古墳時代後期の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されている（バリノ・サーヴェイ株式会社1993）。その結果では、壁際の2点がクスギ節、貯蔵穴の2点がクスギ節とモミ属であり、クスギ節の利用が多い。また、水系が異なるが、宇都宮市富士前遺跡でも古墳時代後期の竪穴住居跡出土炭化材にクスギ節が多い結果が得られている（バリノ・サーヴェイ株式会社1987）。その他、県内では、野木町清六Ⅲ遺跡で古墳時代後期の住居構築材の大多数がクスギ節という結果が得られている（バリノ・サーヴェイ株式会社1999）。これらの既存の結果と比較すると、今回認められた樹種では、クスギ節は住居構築材として同時期に多数利用されているが、クリは全く認められない。また、ヒノキ科は、清六Ⅲ遺跡の住居の可能性のある土坑出土の炭化材に認められた例があるが、住居構築材に認められた例はない。

ここで、竪穴住居跡は台地上の乾いた場所に構築されることが多いため、柱材が出土することは稀であり、柱材と垂木の双方について樹種を明らかにした例は少ない。関東地方北部では、群馬県前橋市横手早稲田遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡で柱材4点、炭化した垂木等の構築材130点について樹種同定が実施されている（バリノ・サーヴェイ株式会社2001）。その結果をみると、柱材も炭化した構築材もほとんどがクスギ節であり、柱材と炭化構築材とに木材利用の違いは認められない。今回、SI-3で認められたヒノキ科とクリは、いずれも耐水性・耐朽性が高い樹種である。ただし、ヒノキ科の方がより樹高が高く、また樹幹が真っ直ぐになる傾向がある。したがって、柱材にヒノキ科（ヒノキ）が用いられたことは、SI-3が大型の竪穴住居跡であることと関係している可能性がある。SI-23では、分析を実施した以外にも炭化材が出土している。今後、これらの炭化材についても樹種同定を実施し、各住居跡の木材利用を比較することが望まれる。また、周辺地域においても、今後さらに資料を蓄積したいと考える。

引用文献

- バリノ・サーヴェイ株式会社1987.炭化材・炭化種子同定「栃木県埋蔵文化財調査報告第85集 宇都宮競馬場附属総合きゅう舎建設地内遺跡 御新田遺跡・富士前遺跡・ヤツチャラ遺跡・下り遺跡」, 栃木県教育委員会,193-197.
- バリノ・サーヴェイ株式会社1993.砂田A遺跡出土の炭化材同定・種子同定及びプラントオパール等の分析結果について、「栃木県埋蔵文化財調査報告第132集 砂田A遺跡」財団法人栃木県文化振興事業団,204-218.
- バリノ・サーヴェイ株式会社1999.清六Ⅲ遺跡の自然科学分析。「栃木県埋蔵文化財調査報告第228集 清六Ⅲ遺跡Ⅳ（古代・中世編）」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団,340-353.
- バリノ・サーヴェイ株式会社2001.横手早稲田遺跡の自然科学分析。「(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第280集 亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,335-360.

図版1 木材



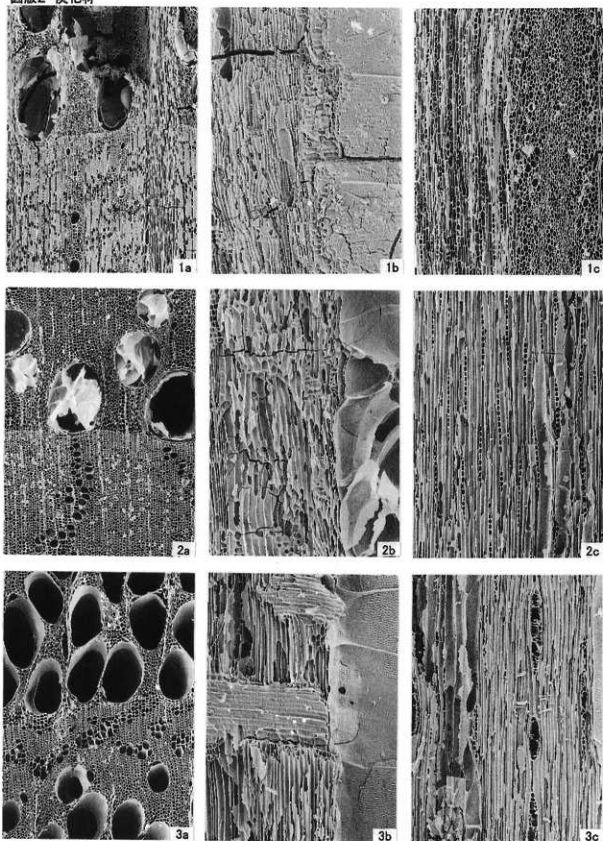
1. ヒノキ (SI-3:P4)

2. ヒノキ科 (SI-3:P1)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μm: a
100 μm: b, c

図版2 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SI-2;サンプル2)

2. クリ(SI-3;サンプル1)

3. キハダ(SI-2;サンプル1)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m: a

200 μ m: b, c



A 調査区全景 (北から)



B 調査区全景 (南から)

図版2



A SI-1付近遠景（東から）



B SI-1完掘全景（西から）



C SI-1カマド（西から）



D SI-1貯蔵穴（西から）



E SI-2完掘全景（東から）



F SI-2 A区 a期炭化材、焼土出土状況（北から）



G SI-2 A区 b期完掘状況（北から）



H SI-2 B区 a・b期完掘状況（南から）



A SI-3完掘状況 (西から)



B SI-3遺物出土状況 (西から)

図版 4



A SI-3柱穴ごとに人物配置 (西から)



B SI-3カマド土層 (南から)



C SI-3カマド天井部陥没状況 (西から)



D SI-3カマド天井部粘土除去状態 (西から)



E SI-3カマド保存処理作業 (南西から)



F SI-3カマド掘り方 (西から)



G SI-3張り出しピット (北から)



H SI-3-P1柱痕遺存状況 (南から)



A SI-3-P3埋積土 (南西から)



B SI-3-P4柱掘り方 (南から)



C SI-3遺物出土状況 (南から)



D SI-3遺物出土状況 (北から)



E SI-5完掘状況 (南から)



F SI-5遺物出土状況 (西から)



G SI-5遺物出土状況 (南から)



H SI-6完掘状況 (南から)

図版6



A SI-6土層 (Hr-FA) 堆積状況 (南西から)



B SI-6遺物出土状況 (南から)



C SK-1完掘状況 (西から)



D SK-21完掘状況 (東から)



E SK-21土層 (西から)



F SK-22完掘状況 (南から)



G SD-1完掘状況 (南から)



H SX-3土層 (南から)



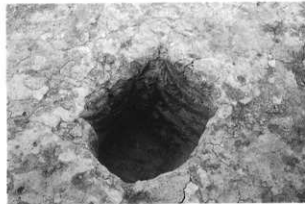
A SX-3 完掘状況 (北から)



B SX-3 遺物出土状況 (南から)



C SX-4 完掘状況 (南から)



D SX-4 柱穴、工具痕 (北東から)



E SE-1 完掘状況 (南から)



F SE-2 完掘状況 (南から)



G SE-3 完掘状況 (南から)



H SE-4 完掘状況 (東から)

図版 8



A SE-5完掘状況(西から)



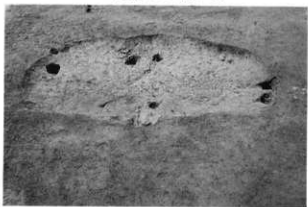
B SE-6完掘状況(西から)



C SD-3~5完掘状況(南から)



D SD-6完掘状況(南から)



E SX-2完掘状況(南から)



F SK-2完掘状況(西から)



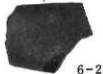
G SK-6完掘状況(南から)



H SK-14・15完掘状況(北から)



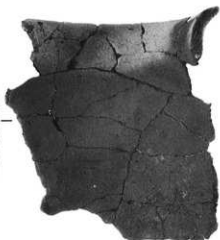
6-3



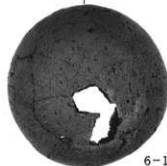
6-2



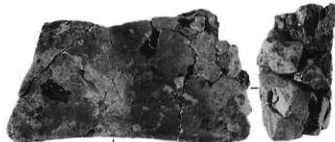
6-5



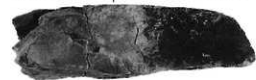
6-6



6-1



6-8



7-1



7-3



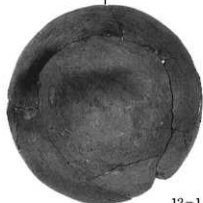
7-5



7-2



7-4

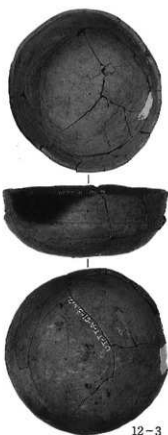


12-1

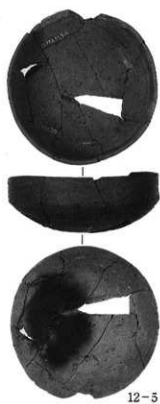
出土遺物 (1) SI-1~3



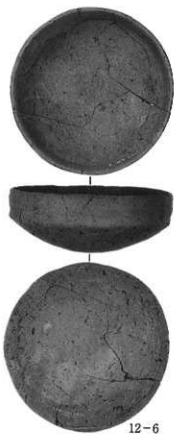
12-2



12-3



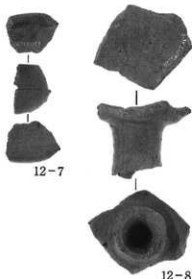
12-5



12-6



12-4



12-7

12-8



12-9



12-11



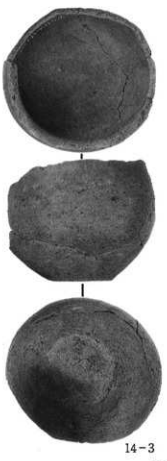
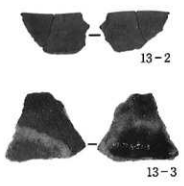
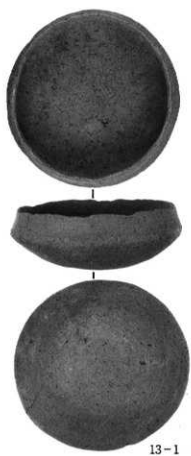
12-10



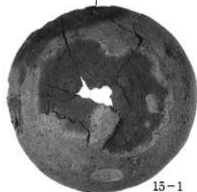
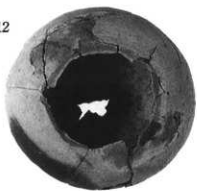
12-12



12-13



図版12



15-1



17-1



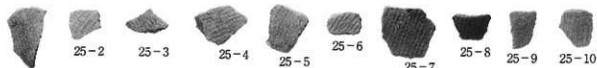
17-2



17-3



17-4



25-1

25-2

25-3

25-4

25-5

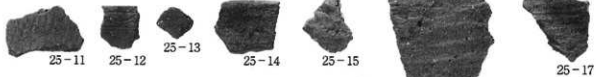
25-6

25-7

25-8

25-9

25-10



25-11

25-12

25-13

25-14

25-15

25-16

25-17



25-18

25-19

25-20

25-21

25-22

25-23

25-24



25-25

25-26

25-27

25-28

25-29

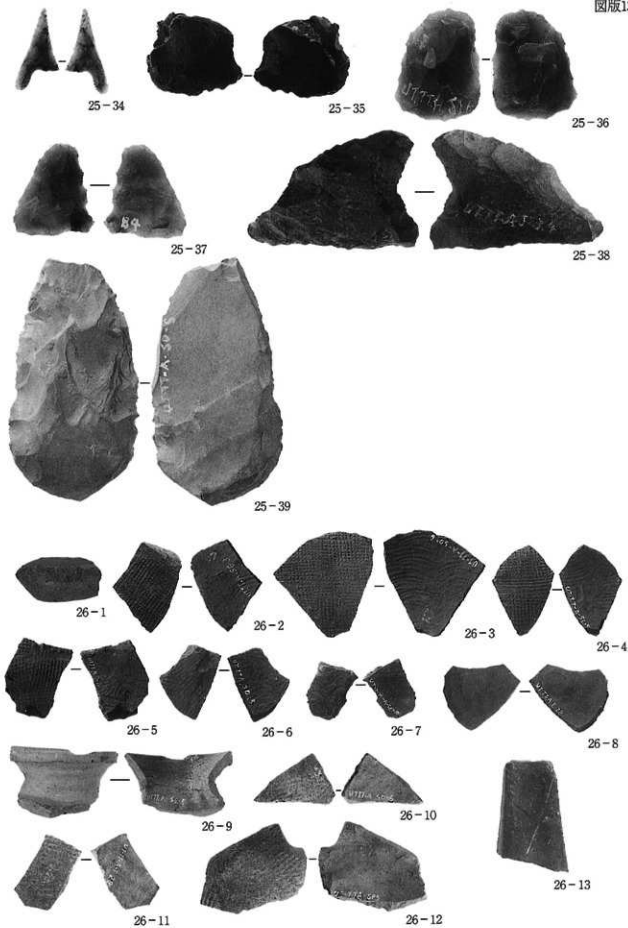
25-30

25-31

25-32

25-33

出土遺物 (4) SK-22、SX-3、調査区内出土遺物 (縄文土器)



出土遺物 (5) 調査区内出土遺物 (須惠器)

報告書抄録

ふりがな	たてのいせき							
書名	立野遺跡							
副書名	福田屋百貨店インターパークビレッジ建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財 調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	水野順敏、青木健二、栗田欣行、河野一也							
編集機関	日本窯業史研究所							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL028-632-2764							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
立野遺跡	宇都宮市東谷町 インターパーク 58街区	09201	448	36度 29分 32秒	139度 54分 24秒	20050421 ～ 20050604	2360 m ²	民間開発
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			出土遺物	特記事項	
立野遺跡	集落跡	古墳時代 中・近世	古墳時代 住居跡5軒、土坑3口、溝跡1条 中・近世 方形竪穴3基、井戸跡6基、土坑22 口、溝跡8条、性格不明遺構2基			縄文土器、石器 土師器、須恵器 石製模造品、白玉 磁石、渡来銭	古墳時代における 県内最大の住 居跡を確認調査 した。	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第55集

立野遺跡 A地区

平成17年11月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課
(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028) 632-2764

印刷 髙松井ビ・テ・オ・印刷

TEL028 (662) 2511